
幻想郷へ来たようです

Rizly

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想郷へ来たようです

【Nコード】

N5741S

【作者名】

Rizly

【あらすじ】

3次元の世界から2次元の世界へと来てしまいました。

まあ、テンプレだったわけで目の前には一枚の紙があつて、要約するとミスったごめん。その世界で不老不死と自由に生きるチート的な能力つけるから、パラダイスを楽しんでね。だつてさ。

(略)

いろいろ調べてみたら幻想郷……いわゆる東方Projectの世界ですよ。

やったね、コロちゃん！

(略)

記憶がどんどん薄れてきてる？それでもいいか。前に向いて進むよ。

作者注

この作品は東方二次創作&オリジナル主人公&チートものです。嫌いな人は回れ右。

プロットはプランBで文章書くの下手ですのであしからず。

後、1話毎にあとがきは書いてません。個別のあとがきは活動報告で。

プロローグ

「何、どこ、どこ？」

俺は目を開けて見た光景。率直に言えば樹海だった。

幸いなことに空から光が降り注いでおり、あたりがしっかりと見えるということぐらいか。

とはいえ最悪だ。

何といっても負の気とでも言うか、人の怨念がこもっていそうな雰
囲気を感じられるほど。後は樹海に入ったことはないが、独特の湿
気のようなものも感じられる。

ここまで来て俺はピンと来た。ああ、夢なのだろうと。

昨夜シャツとトランクスを着てベッドの中に入っていることを記憶
しているし、なにせこの服とコートは冬物であるから、今の季節に
着るものではないし。

……だが、今は着ているものは重要じゃない。今はこんな胸糞悪い
所からは早々に抜け出たい。それだけだ。

すぐさま仰向けになり、背中に感じる湿った土独特の感触を我慢し
ながら寝ようと頑張る。

……結論から言うと、寝られなかった。

湿った土独特の感触も含め、現代のゆとりっ子が寝られるような場
所ではない。サバイバルやキャンプが好きなわけでもないし、生理
的に無理だった。

そして俺がとつた行動。夢なんだから自由に行動してみようか。

と、立ち上がるうとして地面に手をついたとき、封筒があることに
気がついた。

不釣り合いな場所にある封筒は、遺書にも感じ取れたが、とりあえ
ず中を見て見る。

@@注・あまり重要じゃないので、飛ばす人は行が開いている所まで飛ばしてください@@

謹啓 このたびは当方管理のH345 - A3341 - 1000世界の住人である貴殿に対し、管理上の事故が発生し、貴殿が該当世界から消失するという事故が発生しました。

発生要因としましては、実施する予定であったものをテストした要項に不適合があつたことと考えております。通常であれば貴殿を該当世界に戻せるのですが、テスト要項の不適合の影響と思われる原因不明の事象により貴殿を戻すことができなくなつた次第であります。

そのため、貴殿が望んでいると思われる特殊管理世界へと移送し、貴殿には今後自由に生きて自由に死ぬ権利を与えたうえ、移送後の世界にて不利益を被らないように、所謂チートと呼ばれる能力を付加いたしました。詳細は別表をご確認いただきたく思います。

貴殿には大変な不利益等が発生させてしまいましたして申し訳ありませんが、当方一同以後同様の事故を起こさないよう努めていく次第であります。 敬具

@@読み飛ばしはここまで@@

「要約すると、はいはい神の失態別世界移動チートってところか。テンプレだなあ」

如何なる力を創造・破壊・理解する程度の能力

「結構どころか、チート万々歳だろ、これ」

力というのは浮力・磁力などもそうだが、作用する力全てを作り、

無効化し、概念を理解できるということになる。そうならば、敵は
いないという可能性が非常に高い。

「で、他には」

不老不死。ただし、望めば死ぬことも可能。

「いつでもどこでも死ねるってか。まあ、死ぬつもりはないし、ど
うせ夢だろっから気にしないでおっこうか」

他に気になるところは特にないので、この手紙を丁寧にポケットに
しまつて樹海を当てもなくさまよいだした。

で、知つた。夢じゃなかった。現実なんだと。

樹海から出ておおよそ3カ月さまよえばそりゃあ、ね。

1話目 色々回っていたら……

樹海から出て3か月もさまよった理由。答えは簡単で村がなかったからである。

ようやく村を見つけたものの、遠くから解るほど村全体がピリピリとしていた。

近づかないほうがいいかとも思ったが、さすがに3か月も何の情報もないままにいるわけにはいかなかったので、不本意だが村に立ち寄ることにした。

ちなみにこの3カ月で完璧にできるようになったことは、空を飛ぶこと（浮力の破壊と創造）と着火剤等を用いないで火を起こす（火力を創造）の2つだけで、残りいくつかは加減ができないなどの欠点があったりする。

それはともかく、今やるべきことは村人にコンタクトをとって、情報を集めることである。

幸いにも入口の番をしている人がいるということは、村に入って声をかける必要もないだろう。

とりあえず声をかけてみる。

「あの、すみません」

「ん〜、おめえ、見かけねえ顔だし、見たことねえ服だなあ。ひよつとして妖怪か？」

「いや、妖怪だったら貴方は生きてないかと」

「言われてみりゃあそうだな。ってことはなんだ、お前さんは一体「あっちのほうから来たんですが、かれこれ夜を90度ほど迎える事態になってしまいました」

「あっちは妖怪がうじゃうじゃいるところじゃねえか！おめえさん、よく生きてたなあ」

何故か解らないけど、妖怪に遭遇することはなかったらしい。

「ははは……よくわかりませんがね。ところで、差支えがなければ

でいいのですが」

「何でえ？」

「村全体がピリピリした感じがするのですが」
単刀直入に切り出したところで、村の番の男の顔が引き締まった。
地雷を踏んだとかではなく、深刻な事態であることを意味するのだ
ろう。

「おめえさんには関係ねえ、って言いたいかな。この村に寄っちゃま
ったんだから話すしかねえな」

男は自分の髪をがりがり掻いてから、俺に告げた。

「妖怪に、村の娘を渡すことになっちまったんだ。従わないと、村
を潰すと」

なんとなくではあったが、俺は予想していた。が、次の言葉は予想
を遙か斜め上に行った。

「女の妖怪が、自身の嫁に貰うと」

「……………は？」

なんとかひねりだせた言葉がそれだ。嫁発言に対して、俺はどう返
すこともできなかった。

2話目 当事者とその話

「俺、耳が悪くなったかな」

「おめえさんの耳は悪くなってねえよ」

いや、『女』妖怪が『嫁に來い』というのが理解できない。というか、求婚するしても男妖怪じゃないのかと思う。

「で、ピリピリしてんのは娘の婚約者やその取り巻きだ。ただ婚約といつても娘本人が嫌がつてんだがな」

「はあ」

「婚約者としては面白くねえ……だが、相手は妖怪だ。ピリピリするしかできねえみたいだがな」

太刀打ちができないから見守るしかないのだろう。

「だがまあ、おめえさんに関係のねえことだな……っと、そういやおめえさんは旅人だったな。何にもねえ村だが、一晩くらいなら泊める余裕はある。どうする」

「お願いします」

俺は番をしている男に頭を下げた。

で、案内された家がその娘さんの家だったというのはご都合主義というかなんというか。

ちなみに実際に娘さんに会ってみると、黒髪の大和撫子という言葉がぴったりの女性だった。

どうぞ、と茶碗に注がれた白湯を出される。どうも、と言って白湯を一口飲む。ちなみに、現代っ子である俺は抵抗力を馬鹿みたいに高くしているのは別の話。

娘さんは囲炉裏に木をくべ、火力を上げている。

しばらく無言が続いたが、娘さんが言った。

「聞かないのですね?」「妖怪の嫁、ということですか?」と尋

ねる。

「……気をつかったつもりなのですが」

「気になりますよね？」

嬉しそうに言う娘さんに対して、明確に何がとは言えないが漠然と違和感を感じた。

違和感に引つ掛かりはするのだが、「まあ、人並みには気になります」と答えるだけに留める。

「……人並みに、ですか？」

「はい。妖怪のところに行くことに恐怖を感じないのかとか」

「怖くはないです」

「何故、助けを求めないのかとか」「助けを呼ぶ必要がないからです」

「そこまで笑顔で言えることなのか」「言えることです」

娘さんは全て笑顔で言い切った。

正しいことを言っていることは間違いないと思うが、何か違和感を感じ続けていた。

「……婚約者はなんと？」

「何にもです。妖怪に対して嫁に出すくらいならといって襲われましたが」

「え……」

「返り討ちにしました」

拳を握って実にいい笑顔で言い切ってくれた。

それ以上聞くと詳細なことまで言われそうな気がしてきたので、強制的に打ち切ることにした。

3 話目 気になること

なんとか話をそらした後、娘さんは「食事の支度があるので」と言
って準備に行ってしまった。

手伝おうかと申し出たのだが、娘さんがにつこり笑って「男子厨房
に入るべからずです」と言って断られてしまった。

準備をしている間、情報を得るために外に出てもいいかを尋ねた。

「食事ができるころに戻ってきていただければ」と許可をもらった
ので、外へ出た。

田植えをしている人たちの姿や、畑を耕している人たちの忙しそう
な姿を見てると話なんて聞けるような雰囲気じゃない。

少し待ってから聞こうか。と思つた直後、畑を耕していたがたいの
いい女の人が俺の姿に気がついたようで、俺のほうへ向かってきた。

「あんたが権蔵が言っていた旅人かい？」

「そのゴンゾウという人が入口の番をしている人ならそうだと思
います」

今更だが、番をしていた人の名前を聞いていなかったし、自分の名
前も名乗つてもいなかったと思う。……まあ、いいか。

「権蔵があんたのことを悪いやつではないって言っていたからね。

ここの大体の村人はあんたのことを警戒してないから、気軽に声を
かけてみな」

「はい。ありがとうございます」

笑いながら背中をばしばし叩かれる。

「ちなみに、なんか聞きたいことはあるかい？」

「あ、では……」

……

……

…

豪快な女の人から話を聞き終えたところでちょうどいい時間になったと思い、話を切り上げた。

最後に仕事の邪魔をしまして申し訳ないと謝るが、「いいんだいいんだ、もう今日の作業は終わろうと思ってたし。後は息子の嫁がおまんまを作って待ってるから、おまんま食って寝るだけだしねえ」と豪快に笑って言っていた。

一礼をして娘さんのところへ戻ると、ちょうど食事ができており、娘さんは盛り付けを行っていた。

「村はどうでしたか？」

どうぞ、とご飯を差し出され受け取る。

「んと、豪快な女の人と話をしてた」

「ああ、おドム姉さんのこと」

おドムって……大奥っていうより、

「何で、おドム？」

「ドムってしてたからです」

「た？」

「今は細くなっただけど、前はドムって感じだったんですよ。なのでおドム姉さんです」

……あえて何も言わないことにした。

「あとは、何か有益な情報でもありましたか？」

「村の近況や、近くに住む妖怪の話とか、かなり向こうに歩いたところにミジヤグジ様という神様がいるとか……ってどうされました？」

「あ、いえ。なんでもありません」

問題あるようなことを話したつもりはなかったが、何か引掛かっただのだろうか？

「何か問題でもありましたか？」

「大丈夫です。問題ありません」

どこかで聞いたような台詞だったが、そこまで言うのならというこ

とで一旦話を切った。

それから娘さんが村の雑談をして、食事の時間を過ごした。

そして、問題は夜に起きた。

4話目 眞実は時には遙か斜め上

村が寝静つたであろう深夜、俺はこの世界に来てから今日までの約3か月間のことを考えていた。

まずは森の中では、ほぼ飲まず食わず寝ずで過ごした。それでも生きてこれたのは不老不死になったであろうこの体のためだと思う。不老不死になった今、食と休息は最小限以下でいけるのだろうか。食と休息はいい。問題は今後どうするかだ。

東方の世界だけではなく、なんだかんだ言つて力があるものにはトラブルが舞い込む。

トラブルを解決できるだけの『力』はあるとは思つが、『力』をうまく使いこなせない以上、どこかで鍛えるかなどの策をとる必要があるが、それは今は置いておこう。

次に考えるのは、今の時代はいつか。ということである。全て確証があるわけではないが、ほぼ確定したことは間違いないと思う。

畑の女の人から『ミジャグジさま』という単語が出た。『八坂様』と出なかったのは『八坂神奈子』による支配がされていないということ。

つまり、諏訪大戦の前である可能性が高い。

「……そうなるかと大昔に来たんだな」と、独り言ちた。

郷愁という言葉は感じてはいない。どうせ、数千年無事だったらどうにでもなるだろうし。

今の課題は、どうやって生き抜くか。その一点のみ。

「……そういえば、ここの娘さん妖怪が『嫁』に貰おうとしてたんだっけ」

自分のことで精いっぱいだったせいかな、すっかり頭から抜けてしまっていた。

「このまま未解決というのも後味が悪いよなあ……どうしたもの…」

…」

言葉をつづける前に、何かの気配を感じた。

絶対に言えるのは娘さんではない。

全く別の何か。

今まで感じたことのない気配を。

感じた。

「やれやれ、さっそく巻き込まれたか？」

覚悟は決まってるないが、やるしかない。

相手は、扉の前にいる。

扉ががらつと開いた瞬間。

相手に制御できる高火力を叩きこむ。

火力は、寸分狂うことなく、相手に命中し、炎上した。

「§〒 ↑!!!!!!」

絶叫しながらごろんごろんと石の床を転がって火を消そうとする相手に対し、両手に水力を集中させてズドンと燃えている相手に叩きこむ。

火だるまになっていた相手はの火は消え、うつ伏せになって香ばしい匂いを出しながらぐったりとしていた。

火だるまになった相手が回復したのを見計らって、事情を聴く。何故ここに来たのかと。

その理由を聞いた俺は唾然とするしかなかった。

「は？」

「ですから、私がこの娘に襲われた妖怪です」

最初は森に入ってきた娘さんを食べようとしたらしいが、返り討ちにされたらしい。それも、力を使わずに拳ひとつで返り討ちにしたようだ。

ちなみに娘さんを嫁にしようとしたのは、婚約者と結婚したくない娘さんにONEGAIされたかららしく、背に腹はかえられずにやっただらしい。

「で、その妖怪さんが何の用だ？」

「はい……私の能力『睡眠をより深くさせる程度の能力』を使って全村人を眠らせた後、娘と交渉するために来たのですが」

「俺に焼かれたと」

こくりと頷く。

「いや、無視して逃げればよかつたんじゃない？」

「逃げたら、地獄の果てまで追いかけて殴るといわれまして」

……うわぁ。

「だから、交渉しに来たと」

こくり、と頷く。

「それは勝手にやってくれと言いたいけど、あんたが嘘を言っているとも限らんから、立ち会いはさせてもらう。もし何かあったら、解るな」

「はい。ですが、ひとつお願いがあります……もしも娘が暴れたりした場合……助けてください」

「……………考えよう」

本当にやばかったら放置しよう。

……

……

…

結論から言うと、疲れた。

まず最初に、娘さんの部屋の戸をノックすると、「開いています。どうぞ」との声。

妖怪マジビビリ。俺は平然と戸を開けると、布団の上で正座している娘さん。

対面には座布団と莫蔭^{トク}。俺が座布団でいいのかと聞くと、こくりと頷く娘さん。

あの、私とは妖怪が聞くと、娘さんは莫蔭を指差す。びくびくしながら妖怪は莫蔭の上で土下座、俺は胡坐。

「申し開きはありますか？」と娘さん。

「もう、耐えられないので、あの、嫁になるという、話を取り消して……」と妖怪。

「耐えられない、とは？」淡々と聞く娘さん。

「あそこまで、恐喝されて……暴力まで振るわれて」とすでに涙目な妖怪。

「私は、暴力的と認識されているのですね」やはり淡々としている。妖怪は返答せず。

「暴力的と言うならそれで結構です」

そう言っただ娘さんは妖怪の胸倉をつかみ、布団に押し倒す。

「暴力で貴方を私のものにできるのであれば、私はいくらでも暴力を振るいましょう」

と言っただ、熱いキスを妖怪にする娘さん。ちなみに濃いやつ。

娘さんが妖怪の着物の左右の襟をつかんだ時点で雲行きが怪しくなってきたので、俺はすつと立ち上がり、娘さんの行動を力づくで止めた。

それから妖怪の必死の交渉と俺の歯止めと妥協点として、「互いに付き合ってみて決める」ということで落ち着いた。

無理矢理はダメ、ゼツタイ。

5話目 こんなの……普通じゃ考えられない

「一晩ご飯と寝床をいただき、ありがとうございます」

衝撃的な妖怪との出会いの翌日、俺が次の目的地へと旅立つ日。俺は娘さんに一宿一飯のお礼をしていた。実質何か恩返しができるよかつたのだが、それができない現状に申し訳なく思う。

「いえ、こちらこそありがとうございます。おかげで決心がついたので」

「決心？」

「明日には引越します」

それ以上は聞かないことにして、俺は最後に一礼して娘さんの家を離れることになった。

願わくば、名も知らぬ妖怪が無事であることを……。

娘さんの家を離れ、昨日話をした畑作業をしていた女のひと、村の番をしている男の人にも挨拶をして一晩世話になった村を離れる。食糧はわずかながら娘さんが持たせてくれたので、ありがたく食べさせてもらうことにする。

目指す目的地は「洩矢神社」。あっちという曖昧な返答しかなかったせいか、辿り着くか着かないかは運任せの面もあるが。

昼はあっちと言われた方向に対してずっと真つすぐ歩き、夜になったら力の制御の練習を行う。

それを7回ほど繰り返して、神社らしい場所に辿り着いたようだ。

「多分洩矢神社に着いたぞ」

「兄さん。誰に言ってるんじゃ？」

独りごとに対して突っ込みを入られた。声の主を見て見ると、おばあさんがそこにいた。

「あ、ちょうどよかつた。この神社って洩矢神社ですか？」

「ん？ああ。そうじゃよ。洩矢様をお参りにきたのかい？」

「ええ、まあ」

曖昧な返答をするが、もともとお参りに来たわけでもない。そもそもお参りの礼儀作法は二礼二拍手一礼で通るかが解らないとか、お供え物も持ってないし、ご利益……なんだっけ。

「見たところ兄さんは旅のもんだから、旅の安全でも祈っていけばええ」

「そうですね。では今から行つてきます」

俺はおばあさんに一礼して、石段を登り始めた。

石段を登り切り、境内に入ると何かに見られているような感じがした。それも、一つ二つではなく、何十という単位で見られている感覚。

俺は気付かないふりをしながら、手水で手を清め、賽銭箱の前に立つ。この時代に賽銭という概念があるのかは解らないが。

鈴があつたので力強く鳴らす。賽銭はないので、二回おじぎして、二拍。

願いごと……『この神社の神様の体が永久に成長しませんように』
……よし。

一礼。

「あーーーーーうーーーーー」

目の扉がそれはもう勢いよく開いた。

「ちよつと貴方を願つたのかな、かな？私はこの神社の神様だよ。その私に向かつて永遠に胸の成長を止めると！つるぺたでもいいじゃない！個性なんだよ！希少価値なんだよ！つるぺた万歳！」

誰も胸とは思っていないが、目の前の神はどこを勘違いしたのか胸と言いつつ切った。

「そんな無礼なことを思った人間は崇つてやる。この洩矢諏訪子をなめたことを後悔するといい」

結果的にいえば、圧倒的大差で俺が勝った。

崇りの影響『力』を破壊した後、信仰『力』のパイプをを徐々破壊するという神にとつては死に等しいことをすればいいのだから……

「おい。大丈夫か」

俺は声をかけて見るが、「あーうー」と言っただけで体育座りをして空をぼんやりと見つめている。

「諏訪子たん」

「あーうー」

「ケロちゃん」

「ケロちゃん言っな」

ケロちゃんには反応するんだ。

「信仰を潰すのはずるいと思う。私が負けるに決まってるじゃん」

「生きているのなら……神様だって殺してみせる」

「洒落にならないからね、それ！」

冗談のつもりだったのだが、諏訪子は真面目な顔をして言った。

「で、どうするつもりなのさ」

いきなり何を言ってくるのかが理解できずに、俺は聞き返した。「どうするって、何が？」と。

「私にケンカを売ったっていうことは、何か目的があったんでしょ？」

目的はあるにはあるのだが、単にミジャグジを統括している洩矢諏訪子という神に会ってみたかっただけだ。と伝えると、「……はい？」と聞き返された。

「だから、会ってみただけ」

そう返答した俺に対して、本当のことだと解いたらしい諏訪子はがつくりとうなだれた。

同時に、諏訪子の特徴である帽子が頭からぼとつと落ちた。

おまけに、帽子は独立した生命体でないことも解った。

6話目 ケロちゃんといっしょ

諏訪子との戦い（？）から早10年が経過した。

10年間ずっと洩矢神社に居候している。振り返ってみれば居候してからの10年はあつという間だった。

最初の戦いこそ問題はあつたが、それ以後の諏訪子（含むミジャグジ）との関係も悪くはない。

まったり二人でお茶を飲んだり、戦い方を習ったり、神社の仕事をしたり、イタズラをしようとした諏訪子にバツクドロップを決めたり、アームロックを決めたり。

……というか、仕事の回数よりも諏訪子のイタズラを止めている方が多い。

ちなみに、そんなことをしているが俺の生活スタイルは普通としか言えない。

まず朝はおおよそ六時頃だと思われる時間に起き、稀に巫女さんに起こされることもある。

起きた後は諏訪子といっしょに朝食を食べる。食事後、諏訪子は神としての仕事があるが、俺は仕事がないので巫女さんの手伝いか、自分の能力の強化などを行う。

昼になってからは巫女さんたちと一緒に昼食。単に早く食べたいので、「巫女さんたちと一緒に食べれば早く食えるんじゃないかね？」という結論の元である。

昼食の最中、巫女さんたちに昼からの作業を聞く。その内容次第で午後からの行動を決める。

手伝う内容なら巫女さんを手伝い、手伝うことがなければ、昼寝・能力の強化・村に行く・なんか特殊な作業などなどだ。

夕食の時間帯になると、俺は諏訪子と一緒に夕食を食べたり、酒を飲んだりする。主に諏訪子がマシガントークのような状態になることが多い。主に愚痴や面白ネタなどだが。

それが終わると、自分の部屋で部屋でできる範囲で能力の効率化をしたり、突入してきた諏訪子の相手をしたりで就寝の時刻になる。俺の部屋は常に布団を出しっぱなしにしているので、すぐ寝られる状態だ。

諏訪子が突入している場合は、諏訪子が自分で自分の部屋から寝具一式を持ってきて自分で敷く。

後に就寝。

朝起きてごく稀に俺の布団の中に諏訪子がいるのは余談。

そんな一日のサイクルを過ごしているが、特殊な作業というのは結構困る。困るだけで、本当に参るということはなかったのだが、特殊な作業で本気で参ったのはある日のことだった……

今日は掃除を手伝う予定なのだが、諏訪子が来ていない。

仕方がないのでどこにいるかを探してみると……いた。どうやら巫女さんを困らせているようだったので、気配を消して諏訪子の後ろに回り、足を振り上げ、帽子の上からかかと落としを決めた。

その後襟首を持ち、引きずりながら諏訪子を連行した。……これもよくあることなので、慣れた巫女さんも苦笑いしてもそれ以上の過剰な反応はしない。

「あーうー。酷いよ。かかと落としをするなんて」

頭をさすりながら涙目加え上目使いになって訴えるが、俺はきつぱりと「掃除を手伝ってと言っておきながらさぼる方が悪い」とばっさりとしり捨ててやる。

それから黙々と掃除する俺たち。

「すげえ汚れ」

2回雑巾を洗っただけで水桶の水は真っ黒になる。

「ここは私以外立ち入らないからね。仕方ないよ」

「もっと定期的に掃除をしようぜ」

真摯にそう思うのだが、諏訪子は「めんどろだからやー」と言っている。なので細かいスパンでの掃除をするつもりはないのだろう。だが、さすがにこの汚さは『面倒だから』で片づけてはいけない。そう思いながらも、それ以上言っているとぼつちりが来るのは解っているから何も言わない。

「つていつか、ここは何で誰も立ち入らないんだ？」

「何でだろう？特に意味もないと思うけど、強いて言うなら私の部屋から近いから？」

「滅茶苦茶汚いからじゃないのか？」

「……………そうかも」

滅茶苦茶汚いからと言うのも納得できるのが嫌なところだ。というか、この汚れは普通じゃない汚れだぞ……………

「うわ、この汚れねばついてる」

「雑巾がもう灰色じゃないよー！」

「……………これ何の汚れだよ、雑巾が破れたぞ」

「え、本当……………うげ」

「ここは誰も掃除したくないな」

「あーうー。もうやだー」

「というか巫女さんたち総動員しようぜ」

「それ名案！ちよつと呼んでくる！」

開始直後で音をあげた俺の提案によって犠牲者は増えることになった。

諏訪子は（ちよつど手が空いていた）巫女さん4人を連れてきた。

巫女さん達、部屋の中を見て顔が引きつったぞ……………

それから俺と諏訪子と巫女さんたちと阿鼻叫喚の掃除が始まった。

掃除が終わると、それはもう綺麗な部屋になった。

ちなみに、掃除を始めたのが昼食後（諏訪子を引きずって来てから）始めて、今は空がオレンジ色に染まっていた。

7 話目 諏訪大戦参戦……させられた

「大和の神が支配下に下れと喧嘩を売ってきたから受けるよ」

昼食を食べ終わって、境内で修行をしているときに「あ、お使い行つてきて」並みにあつさりと言われた。対する俺は、

「戦いに行くのは構わないけど村や神社に被害を及ばないようしてあ、向こうに開けた場所があるからそこで戦つて」

「いやいや、そこで『俺も手伝うよ』とか『何かできることがあるか』とか聞くものじゃないの？」

「『お断り』『頑張つて』」

と断つて修行を続けようとしたが、諏訪子が『手伝えー。手伝えー』と言いなから俺の服をつかんでガクガクガクガクと全力で揺すつてきたので、俺がダウンする前に手伝う宣言をさせられた。

そして大戦当日。

俺たちの軍勢……諏訪子（大将）・俺（副将）・ミシャグジ達。

向こうの軍勢……八坂神奈子（大将）・その他大勢。

「諏訪子……神の友達が少ないんだな」

「酷っ！」

「だつてさ、向こうはあんなに色々な神がいるんだけど、こっちはミシャグジだけじゃん。ミシャグジが悪いというわけではないからミシャグジたちは祟んな」

ミシャグジたちの祟りを受け流しつつも漫才を繰り広げていると、
「ずいぶんと余裕だねえ。でもまあ、大将であるあんたが弱い神になめられてるんだから、簡単に行きそうだねえ」と向こうの大將である八坂神奈子が大声で言う。

向こうの挑発に諏訪子は「それはどうかな？八坂神奈子。弱い神と言っている奴が実は強いかもしれないよ？」と返す。

「信仰の弱い神など弱いだろうに」

「どうだろうね」

諏訪子と八坂神奈子は互いににやりと笑う。そして、

「まあいい。さっさと片付けてしまおうかね。私は洩矢を倒す。お前らのはあの弱い神と有象無象の祟り神を片づける」

「私は八坂神奈子を片づける。その他をお願い」

そして、大戦は勃発した。

「先制攻撃つと」

滅茶苦茶強い気と霊力を混ぜ、球状のエネルギー体を作り出し、破壊力を上げてその他の神に向けて叩きこむ。向こうの神たちは舐めきつていたために直撃。

ちなみに、これは諏訪子がモロに喰らって一撃で倒れるほどの威力なので推して知るべし。三神ほど倒し、二神くらいに大ダメージを与えた模様。

「……もうめんどいから連射するか」

ズドンズドンズドンと叩きこむ俺と、逃げまどう神々。近づいて俺を倒そうとした神はミシャグジたちによって倒されるか、後退させられる。後退した神に対しては集中砲火を浴びせる。

「やばい、なんかこれ凄くたのしい」

楽しくなってきた俺はさらに砲撃速度を上げる。向こうの神たちは一人、また一人と脱落していき、やがて残った神に当たらなくなってくる。

なんか楽しくなくなってきたので、砲撃を止める。

「……はあ……はあ……や、やっと、力が尽きたか、こ、これくらい、余裕」

「いや、めんどくなくなってきたからミシャグジたちに変わるわ。ってなわけの後頑張れ」

「は？」

相手があっけにとられている間にミシャグジたちによる攻撃が始まった。向こうもだいたい弱っているせい、反撃はままならないようだ。

とはいえ向こうも神である。うまく受け流したりするなどして致命的なダメージだけは避けている。

こっちは一進一退の攻防というところだが、向こうはどうなんだ？
と思っただけで見る。

諏訪子と八坂神奈子は一進一退の攻防だ。でかい柱とか鉄の輪なんか
かが飛び交ったりしているが、こちらに飛んでくる気配はない。

「お前、そこで休んでいいの？」

「別にいいよ。後はミシャグジたちが活躍すればいい。だけど、やるなら相手になるよ？」

「遠慮しよう。間違はなく私が負けるだろう」

俺はそうか。と一言言い、大将同士の戦いを二人で見る。

「我々は貴殿のことを弱い神と決めてかかっていた。だが、貴殿は間違はなく強い神だ。謝罪させていただく」

「別に気にはしてないけど一つ訂正。俺、人間」

「は？いや、貴殿に信仰が集まってるだろうに……現人神か？」

「素で人間。不老不死ではあるらしいけど……っと、倒れたミシャグジたちを回収するか。貴方も倒された大和側の神を回収した方がいいんじゃない？」

よっと言って立ち上がり、向かってきた神たちを殴り倒しながら戦闘不能になってミシャグジたちを回収する。

どうやら向こうの大和の神も味方の回収をし始めたようだ。俺はさつきまで座っていた後ろにミシャグジたちを置き、大和の神も同じように力尽きた味方を置く。

1日目で両者の戦力が半分くらいになった。大将同士の戦いはまだ拮抗している。

2日目に入り、回復したらしいミシャグジと大和側の神達が後ろで戦闘を始めた。

俺は寝ていたのだが、騒音のせいで起こされてイラッときたので、敵味方問わずエネルギー体乱射。少しスッキリしたところで「負けたんだから少し静かにしていただいただけねえでございますでしょ

うか？」と言うと、両者首を盾にくくくくと縦に振って肯定してくれた。

それでもスッキリとしないので、まだ戦闘可能な大和側の神を伸縮可能なエネルギーの鞭で捕獲しぐるぐると振り回し、戦闘可能な大和側の神に全力でぶつける。

スッキリしたので元の場所に戻る。敗北した神達はもう何もせず静かにしていた。

俺はポケットから携帯食料と水を取りだしてもそもそも食べながら、諏訪子と八坂神奈子の戦いをぼんやりと見る。

2日目でもやはり拮抗した戦いとなっているが、若干諏訪子が押されているようにも見える。結末はぼんやりと覚えているが、戦いを生で見ると『どっちが勝っても負けてもおかしくない』。

3日目に入ると、大将たちは満身創痍になっている。どっちの攻撃が当たっても、一撃が命取りになるのは間違いない。

ちなみにミシャグジ対大和の神々は引き分けになった。俺の存在は数に入れていない。

朝昼一進一退の攻防が続いていたが、日が沈み始めた頃ついに決着がついた。

八坂神奈子のオンバシラによる攻撃が諏訪子に命中し、諏訪子は気を失って吹き飛ぶ。俺は先回りし、地面に落ちる前に諏訪子を抱きとめた。

「あんたたちの勝ちだね。八坂神奈子」

「おや、アンタは傷一つ負ってないね……逃げ切ったのかい？」

「詳しいことはあっちの軍勢に聞けばいい。今は諏訪子を休ませることを優先させる」

そう言っつて、俺は洩矢神社へと歩みを進めた。

8話目 食事と別れとプロレスと

ある日、突然ラーメンが食べなくなつた。

だが、この時代のこの国にラーメンなんてありはしない。

だから俺は考え、思いついた。

なければ作ればいいと。

まず俺はスープをメインに作ることにする。麺はスープにマッチするよつに調整すればいい。

最初の壁は平行して作っている麺に納得ができなかつた。だが、回を重ねることにいいのが出来上がった。

偶然かどうかは解らないが、スープはそこそこの最初からそこそこの味は出ていた。出てはいたが、納得はしなかつた。

試行錯誤をして徐々に完成系へ近づかせ、完成した一品が出来るのに何杯もの普通のラーメンが出来たが、20年かけて今誰かに出しても恥ずかしくないラーメンが出来た。ただ一つだけ、言わせてもらおう。

「もうラーメンはしばらく見たくない」

20年間毎日研究したんだから。

「え〜」

「なんだ神二人」

ラーメンを食べ終えた諏訪子と神奈子がブーイングをしてきた。

「また作つてよ〜」

「私もこれほどまで美味しいものはあまり食べたことはないんだ。だからまた作つて」

「5年くらいしたら考えよう」

ちなみに作つたのは塩ラーメン。シンプルイズベストだ。

塩は簡単に手に入った。海の水をすくって一気に水を『猛火力』で蒸発させる。と、残つたのは塩と微々たるゴミだが、微々たるゴミを『吸引力』で取り除く。

実にチートの無駄使い。

具には鶏肉とタケノコ。チャーシューとメンマが作れなかったのは痛い。

「それにしても、これでも完全じゃないんだろう?」

「まあね。だがしばらくは開発しないからいつ完璧なものになるかは解らん」

「ほう。それじゃ完璧なものになったら食べさせてもらおうか」

「解った……あ、それと俺来週にはここから出て行くから『ブフツ』汚いな」

すすっていたお茶を吹き出す諏訪子と神奈子。幸いカテキンの被害はちやぶ台だけで済んだ。

「ゲホツゲホツ……それはいきなりすぎじゃないかい?」

「いや、前々から考えていたことだから」

俺が言ったことに神奈子は目を瞑って「そうかい。寂しくはなるが、すでに決めたんなら私には止めようがない」と言った。だが、諏訪子は俯いたままだ。

「諏訪子?」

「……決めたことなら、仕方がないよ。私も、見送るよ」

身体を振るわせながら言う諏訪子に、俺はどう声をかけていいのか解らなかった。

部屋に戻ってから俺は諏訪子の事を考える。いつもなら何かしら話す諏訪子だが、今回は何も喋らなかった。

やはり出て行く発言がまずかったか。と思うが、俺の中ではすでに決めたことだから覆すつもりよほどな事がない限りない。

「このままじゃ安心して出ていけない……」

さて、どうしたものかと思っていると、戸をこんこんと叩く音がした。

「入っていいよ」

すっ、と入ってきたのは諏訪子だった。

「どうした?」

「……………」

俺の目の前で正座する諏訪子。

諏訪子はずつと俯いたままで、何も言わずに時間が過ぎていく。

「何か言いたいことがあるなら言ってくれないと困るんだが」

諏訪子から話を切り出さないので、俺からすることにした。

「…………私、考えたんだ。出て行くっていうのは解った。いずれまた会える。でも、一緒に暮らしてきた100年。私が生まれて、神になって、一番楽しかったし、充実してた俺は黙って聞く。」

「なんかね。いつかは出て行くんだろうとは思ってたけど、私の覚悟が出来るよりも早く言われちゃって…………こんな気持ちになったのは初めて。でも、また会えるって信じているから、笑って見送る」少し無理して笑う諏訪子。

何か慰めとかをしようかと考えたが、雲行きがいきなり怪しくなった。

「だけど、私の中で何かが空っぽになったの」

うつすらと嫌な予感がし始める。

「どうすれば空っぽになった何かを満たせるのかなって、考えたの。で、答えが出たんだ。…………ねえ……………」

二人の、赤ちゃんを、作ろう。

その一言で諏訪子の目はハイライトの消えた…………死んだ魚のような…………ヤンデレ…………そんな目で俺を見ていた。

直感的にやばいと感じ、部屋を脱出しようとするも、戸も開かない。如何なる能力を試しても無駄に終わった。

「どうして逃げるの？痛いのは私だけなのに」

迫る諏訪子の手から逃れるように、どたばたと音を立てる。

「ここまで騒げば神奈子が助けに……」

「来ない」

「えっ」

「酒をガンガン飲ませて潰した」

「なにそれこわい」

油断した俺は諏訪子のタックルで布団に倒され、プロレス勝負となつた。

勝負の結果、3回勝負で2勝1敗。最初の勝負こそ負けたが、次の勝負は固め技で勝利し、3回戦では疲れ切った諏訪子に追い打ちをかけてギブアップさせた。

勝負した翌日、諏訪子は自己嫌悪に加え何故か「……腰が痛い。歩くと違和感が。あーうー」と言つて寝込み、神奈子は二日酔いでダウンして寝込んだ。

俺はある種の悟りを開き直り、いつものパターンで行動しようとしたが、巫女さんに神様の仕事をしてくださいと強制連行され（後に神奈子の命令と知る）、慣れない仕事をする事となった。

9 話目 すごく、たくましいです

時間は早いもので一週間が経った。

その間は平常通りだったが、違うことと言えば諏訪子が俺の部屋に毎夜部屋に訪れたことだ。

責任云々のことも話したが、「私が無理矢理したんだから気にしないで良いよ」と言うだけだった。

最後には「何人も嫁貰えばいいよ」などと言いやがったので、何も言えなくなつた。……突っ込んだら「よし、神奈子も混ぜよう」とか言いそうだし。それはさておき。

出発の見送りは諏訪子と神奈子だけだった。巫女さんや先代の巫女さんたちとは昨日の昼のうちに別れを済ませている。

「それにしても、収納力と保存力だったか。あれだけの食料をよくそのカバン……だったかに入つたな」

「この力が規格外だと気づかされたよ。しかし、入つたから良かったものもし入らなかつたらさ、諏訪子がバカみたいに用意した食料が無駄になつたと考えると……別の意味でぞつとするよ」

「……ひゅーひゅー」

吹けない口笛を吹こうとする諏訪子。俺と神奈子は苦笑いをするしかなかった。

「さて、そろそろ出発するよ」

「もう行くのか」

「ああ。天気も崩れなさそうだけど、崩れたら困るし」

神奈子は「そうか」と一言。諏訪子は無言で抱きついてきたので、頭を撫でてやる。いつもなら「子供扱いするな」と怒るが、今日は特別らしい。

しばらくして、諏訪子が俺の腰から離れる。

「さて、もう行くよ。見送りありがとう」

「礼はいらないさ。じゃあ元気でな」

「またね」

「ああ。またな」

また会うために、さよならは言わない。

また会うために、笑顔で別れた。

涙も湿っぽさも要らない。明るい『またね』。

俺は歩き出す。

諏訪子と神奈子は、俺の姿が見えなくなるまで手を振ってくれていたようだった……

で、別れた翌日にトラブルが舞い込んだ。

「行き倒れー!?!」

うつ伏せに倒れているサイドテールにしている人がいた。

叫んでみたは良いものの周りに誰もいないし反応もない。

「助けるか」

すっ、と近寄って呼吸を確認すると、呼吸はしている。

倒れている人の左腕を俺の方に移動させ、肩と腰の辺りを持ちこち

らを向くように反転させる。

首を少し動かしたときに気がついたが、女の人がかすかに何かを喋

っているようだ。

口元に耳を近づけて聞いてみると、

「お……お腹……空い……た」

反射的にいきだ折れていた人の頭を叩いた俺は絶対に悪くないと断言する。

仕方がないので食糧を手渡しすると、倒れていたはずなのにがばつと起き上がり、食糧を奪い取るように取ってがつがつと食べる。

「はっ、生き返った。食料恵んでいただいてありがとございませす」

「……いや、それは構わないんだが、何で行き倒れてたんだ？」

「実は娘が家出をしてしまいました……私の、可愛い娘の、アリス

ちゃんが」

とりあえず原因を聞いてみる。

「お誕生日のプレゼントをあげたんです……アリスちゃん、そのプレゼントが気に入らなかつたみたいで」

「プレゼント？」

「くまさんプリントのぱんつを……って、何でそんなゴミを見るような目で私を見るんですか！去年までは喜んでくれていたんです！だから今年も……」

「同じようなものをプレゼントしたら嫌われたと」

きついつつこみをする、懐からロープを取りだし、近くの木にかけ始めた。

「ちょ、待て」

俺は羽交い絞めにして、首つりを止める。

「離してください私はアリスちゃんに嫌われたからもう生きていけない生きる意味がないから死ぬの死んでアリスちゃんに二度とあわないようにするのがめんなさいこんなダメなママでめんなさい」
必死になだめて思い留まらせることに成功する。だが、円形の結び目があるロープが木にかかっていたので、黙ってロープは焼き切っておく。

「で、どうするんだ？娘を探さなきゃないにしろ、場所が解らないと」

「あ、それならアリスちゃんの持ち物に目印があるので、それをたどって……って今度は何故汚物を見るような目を」

「娘に発信器をつけるなんてひとでなしの思っただけで」

ロープはもうないとたかをくくって正直に言ったが、懐から2本目のロープが出てきたので、またしても思いとどまらせることになった。

10話目 母親としてやること

結局、精神的に疲れた俺は娘を探す手伝いをすることにした。結論を出すまでに、焼き切ったロープは両手で数えられなくなった。焼き切った時の苦労は思い出したくもない。

しばらく歩き続けると突然歩くのを止め、ある一点を見て呆然としていた。俺もつられるように見ていたところを見る。

数人？いや、数体だろうか。人が妖怪かは判別がつかないが、何人かに囲まれている少女の姿。おそらく、この少女が娘なのだろう。よく見て見ると、少女を囲んでいるそれらが何かを話しているようだ。試しに何を話しているかを耳を澄まして聴いてみる。

「大丈夫、BOKU達は紳士だから」

「少女は愛でるもの、おさわりはしないさ」

「君、この白い牛乳を飲まないかい？」

……変態か。

俺は無言で変態共に向けて、火力を球状に固めて変態共に投げつけた。

変態共の処理した後、少女を迎えに行く。「大丈夫か？」と聞きながら、お姫様だっこで抱きかかえると若干抵抗された。「もう変態はいないはずだ。安心しろ」と声をかけると大人しくなった。

だが、「母親のところに行くか？」と言うと、すごい勢いで首を横に振った。

ふと横を見ると、拒絶された瞬間を見ていたらしい神綺が懐からロープを取り出して木にかけた。かけ終わった後にロープを焼き切っておく。

耳を澄ますと「アリスちゃんに嫌われたあ……」と泣いている。今は放置。

俺は幼女から泣いている母親を見せないようにして、事情を聞くことにした。座れる場所を探すと、ちょうど良く切り株があったので

幼女をそこに降ろし、隣に俺が座る。

「とりあえず名前を聞いて良いか？」

少女は少し間をおいてから「……アリス」と一言。

「アリスか。良い名前じゃないか」

「……ありがとう」

自分の名前をほめられたアリスは嬉しそうだ。

「で、何であそこにいたんだ？」

「ママと、ケンカしたの」

ケンカ？それは初耳だった。てっきりプレゼントに不満を持ったアリスが飛び出して行ったものだと思っていたが、違うようだ。

「……ママが、前に誕生日に何か欲しいものある？って聞いてきたの。私は『可愛いお人形さんが欲しい』って言ったの。だけど、ママから貰ったのは違うものだったの。だから」

「ケンカになつて飛び出てきてしまった」
俺がそう言うと、アリスはこくと頷いた。

「……ママが忙しいのは解っているけど、お誕生日の贈り物のことは覚えておいてほしかったの」

「そうか」

「ママには悪いことをしちゃったって思ってるけど、……ママはそんなことよりもお仕事を優先させてると思うの。いつも帰ってくるのは時々で……私、知らない子なのかな」

アリスは俺を不安そうな目で見上げながら聞いてきた。

「嫌いということはないだろう。知らない子なら、誕生日に欲しいものなんて聞かないさ。それに、いくらバカでドジで救いようがないほど思いこみが激しくて」

途中でアリスの目が怒りへと変わってきたので、アリスの頭を少し乱暴に撫でて「アリスは母親のことが好きなんだな」と俺が言うと、小さい声ながら「嫌い……じゃない」との答え。

「素直じゃないな。だが、アリスの母親も同じでな、アリスが大好きな母親はやること全部を投げ出して、娘を探しに来たんだからな」

「……嘘」

「本当だ。で、そろそろ出てきたらどうさね？」

俺は草むらをじっと見ると、アリスもつられて見つめる。じっと見つめていると、観念したのか姿を見せた。

「ママ！」

母親の姿を見ると、座っていたアリスは立って走りだした。走ってきた娘を受け止め、抱き合う二人。

「ママ、ごめんなさい……」

「いいの。私が悪いの。バカなのは私なんだから……アリスちゃんをこんな怖い目に遭わせちゃって」

親子の再会を邪魔するつもりはなかったもので、俺はそっとその場から離れた。

空気を読むとともに、忘れていたことだったが変態共の本格的な処理をしておく必要があったので、ついでにやっておく。

処理を終えて戻ってくると、ケンカの話は片付いていたようだった。

「何から何までありがとう」

「そこまで大したことはしてないさ。無事だったようだしな」

俺はここで別れて旅を再開しようとしたが、きゆるる、という音で再開を断念する。

「あの、差し出がましいお願いなんだけど」

何を言いたいのかは見当がつくが、とりあえず聞いておく。

「食料、貰えないかな？二人分」

そりゃそうだ。ほとんど着の身着のままのアリスと、空腹で倒れていたこいつが食料をもっているはずがないのだから。

用意した食事を食べたアリスは、俺の膝の上で寝てしまっている。

「本当に、何から何までごめんなさい」

「気にするな。疲れていたんだろう。小さな子が何日か解らないが

慣れない一人旅だったんだ」

アリスを毛布にくるんで、負担をなるべくかけさせないようにして地面にゆっくりと寝かせた。

寝ているアリスの頭を撫でてやる。

「ねえ、私って母親失格かな？」

「藪から棒に何かと思えば……まあ、真面目に答えるとすれば、家族のスキンシップ不足。だから失格」

俺がそう答えると、「やっぱり、そう、だよな」と一言。

「アリスは賢い子だ。母親のアンタに甘えたくても、迷惑がかかると考えて本心を出さなかった。本当に愛していると伝えたいなら、アンタが倒れないように時間を作って一緒にいてやれ。まあ、子供もいない120歳程度の俺が何を言ったとしても説得力はないかもしれないが」

「……私と同じくらいの歳」

「言うところはそこか？」といったのち、コイツの左右の頬をつねりむにと引つ張る。「いひやいいひやい」と言われるが無視。

「少なくとも、親がいるだけで安心するだろうから、くどいようだが、アリスを愛してるんなら工夫して時間を作れ。バカっぽいアンタには無理かもしれないが」

「ひどっ。それに私はアンタじゃなくて神綺っていう名前があるんだから」

ぷくつとふくれる神綺だった。しばらく二人で雑談をしたが、神綺は「悪いけど、先に寝るね」と言い、アリスの横で寝た。

「そう言えばアリスは人形が欲しかったって言ってたっけ？」

母親から後に貰えるかもしれないが、人形の数が多い方がいいかと思っただので俺からもプレゼントすることにした。

三等身くらいで金色の髪。服はアリスが着ているもの。

集中し、時には繊細に、時には大胆に形を描いていく。

しばらくすると、俺の手の中には思い浮かべたデザインの人形が握られていた。ちなみに能力がここまで進化してしまったのはだいた

い諏訪子のせい。

「こんなものかな？」

俺は切り株に布を敷き、人形を座らせた。その後、俺も眠りについた。

11話目 宴会ですか(笑)

朝起きて食事を3人で食べた後、俺は昨晚作った人形をアリスに渡して「大切にしろよ」と言う。「うん、ありがとう」と笑顔で頷くアリス。

「アリス。ママに嫌なことをされたら俺の娘になるか？」

二度とこういうはないとはないと確信している俺は、半分冗談めかして言う。

「ちょ、アリスちゃんに何て事を言うの」

アリスがまんざらでもなさそうな顔をしていたのに気がついた神綺は、アリスを抱きしめながら語る、と俺を威嚇する。

「アリスを俺に取られたくなかったらいいママになってやれ」

可愛く怒りながら「なるもん！」と言う神綺。そのあとふっと、笑顔に変わる。

「その意気だったら大丈夫だろう。じゃあ、俺はそろそろ行くよ」

「……またいつか会いましょう。アリスちゃんもお別れして」

「……ばいばい」

「アリス。また会いたいんだったら『またね』だ」

「またね？」

「そう。『ばいばい』は二度と会えない別れも意味するんだ。今は解らなくても良いけど、覚えておけ」

「……うん。またね、パパ」

自分で巻いた種とは言え、『パパではない』と訂正した後には俺は神綺とアリスと別れた。

またいつか会えることを祈って俺は再び旅を始めた。

朝に神綺とアリスと別れ、今は昼くらい。少し休もうと思って休め

る場所を探していると、木の小屋を見つけた。

誰も住んでなさそうな小屋だったので、おもむろに戸をあける。

「やあ、ようこそ宴会へ。この酒はサービスだから、まずはイッキで飲んで欲しいさね。うん、絶対に飲むさね。済まないさね。鬼の顔もって言うし、謝って許してもらおう

とも思っていないさね。でも、この酒の強さを感じたとき、君は、きつと言葉では言い表せない 酩酊みたいなものを感じてくれると思うさね。殺伐とした世の中でそういう気

持ちを忘れないで欲しいさね。そう思ってこの酒を渡したさね。じやあ、……………宴会しようさね」

パタン。と俺は思わず戸をゆっくりと閉めてしまった。小屋をあけたらしつこくハウス……もとい1人宴会だったなんて笑えない。

ついでに言うなら中にいたのは、頭の左右に鬼の証である2本の角を生やしていた女性。

宴会に付き合わされるのは面倒だしどうしようか。と考えていたら戸を思いつきり引かれた。

「なんさね！人が宴会しようと言ってるのにさ！いきなり閉めるなんて酷いさね」

と怒りながら文句を言われる始末。

「休むだけなのに、酔い潰されたらたまったものではないので」

「……………つまらないさね。よし、ならば喧嘩だ」

「は？」

俺は嫌な予感がしたので、すつと身体を右にずらした。

ゴツ、という衝撃波が後ろに飛んでいったのが解る。当たったら恐らくミンチ確定だっただろう。

と思ったと同時に、右フックが相手の左頬（相手側から）にクリテイカルヒットを決めていた。「やばっ」という俺の間抜けな声と共に、鬼は手前にぐらりと倒れたので、地

面に倒れないように支えた。

呼吸はしているようなので命には問題ないと思うが、『この女性は悪気はあったわけではないだろうし、無事だったからいいか』と思ひ、女小屋の中に運んで介抱すること

にする。

気絶させたのしまったのが昼だったが、今はもう日が暮れている。女性が目覚めるまでの間、俺は囲炉裏を借りて料理を作っていた。

「……つたあ」

声が出たので振り向くと、頬を抑えながら半身を起こす女性の鬼。

「起きた？」

「……ん、ああ。少し記憶は飛んでるけれど大丈夫さね」

どう考えても大丈夫ではないと思うのは気のせいではないと思うが、突っ込むのも面倒だったのでそのままスルーすることにした。

「まさか人間の一撃で倒されるなんて思ってもなかったさね」

「神を沈めたこともある攻撃なので」

「え？」

「力を使いかけたやつを潰したり、喧嘩をふっかけられたから返り討ちにしたりとかことがあるので」

沈めた9割近くが、宴会で酔っぱらって悪ノリをして被害が出たり出る前の鎮圧だったりする。

「人間なのになんかやることが人間じゃないさね。でもまあ、そんな細かいことはどうでもいいさね。おまーさん宴会に参加してほしいさね。今……夕方だから、あと2、3刻

くらいしたらそろそろ参加者が来るさね。酒とかつまみはあたしらがだすし、他の鬼達に喧嘩も売らせないさね。だから参加してほしいさね」

「いや、貴方の意識が戻ったので俺は旅を続けるので……」

これで。と続ける前に目の前の鬼は、

「それなら旅の予定を伸ばすさね。だから宴会に参加するさね」と言う。

「……ですから」

「宴会に参加するさね」

「ですから」

「宴会に参加するさね」

「……あの」

「宴会に参加するさね」

無限ループの恐ろしさを初めて知った。結局は俺が折れることになった。

「……それしかないようですので。宴会の前に少し仮眠するので、宴会になったら起こしてもらえますか？」

「寝るのさね？何ならあたしがひざまくらをするさね」

遠慮しようとしたが、ぐいっと引っ張られて女性の太股に頭を置く形……ひざまくらをされる形となった。

された後もひざまくらを辞退するも、「遠慮しなくてもいいさね」

と断られ、何を言っても無駄に終わったので、結局そのままひざまくらをされることになった。

12話目 何笑ってんだ飲まずぞ

鬼の宴会。

他者から見れば地獄か天国かは解らないが、俺からしてみれば、うまい酒とうまいつまみが出されていたのだから天国と言えは天国だ。だが、全員が天国とは限らなかった。

すでに宴会は2日目に入っており、予想できたことだが酒が尽きたのだった。

鬼達もいい鬼が多かったので、若干酔っていた俺が「酒を造るか」と言った。「らしい」。

『らしい』と言うのは、このあたりから記憶が曖昧になっていて、気が付いたら鬼が撤収準備を始めていたのだ。

教えられた話を元に、あつたことを再現してみることにした。

「この壺に目一杯造りますね」

空になっているかなり大きい壺全てに能力で酒を造った。酒の強さは鬼が持ち込んだ酒よりも何故か結構強くしていた。

ちなみにこの酒は味も良くて好評だったようだ。気を良くした鬼達が俺に酒を注ぎ、俺は鬼顔負けに飲んでいった。

俺が鬼顔負けに飲むと、鬼達もそれを追い越つくか追い越すような速度で飲む。その結果、二日目の宴会に加え、普段自分たちが飲む酒より強い酒をがぶがぶ飲んだせいか、鬼の一部が酔い潰れた。

しばらく俺と残った鬼たちで飲んでいたようだが、気が付くと俺の雰囲気の種類を問わず如何なる女、また一部の男を魅了するものに変化したらしい。

それに魅了された参加者の大半が魅了され、甘い蜜を舐めようと挑んだが、俺は全てをかわした上、反撃とばかりに襲った鬼全てに酒をがぶ飲みさせて酔い潰させた。

なんとか誘惑に打ち勝った鬼達はまずいと思い、俺から酒を取り上げようとなんとかしようとして逆に潰されたが、勇敢な鬼が「こ

こは俺に任せる。いいか。俺があの人間の注意を引く。みんなはあの人間から酒を奪い取ってくれ。これが終わったら宴会の続きをしようぜ」

何とも死亡フラグ満載の言葉だったが、突撃した鬼は酔い潰されたものの、俺から酒の壺を奪い取ることに成功し、この一部を破壊する。

だが、これがいろいろまずかったらしい。

「俺の造った酒、美味しくなかったのかな……みんなに飲んでもらいたかったのに」

悲しそうな言葉と表情を見た鬼達は俺をなだめるが、酒を差し出された瞬間覚悟を決めて、その酒を飲んで潰れる。

手持ちの酒で3人を潰した後、残るは1人だけとなった。

「……あははあ」

「おまーさん。何が目的なんだい？」

「何がですかあ？」

「鬼を誘惑して、全員潰したのは」

「誘惑なんてしてませんよお……みんなで楽しく飲もうと思っただけですよ。俺も幾分飲み過ぎたようですが」

「……他意はないのさね」

「他意？んー。どういことですかあ？」

「こついことさね」

自分の口に酒を含み、俺の顔を両手で掴んで固定した後、口移し。

「あたしは強い男が好きさね。あたしに勝てる鬼なんていなかったさね。酔っているおまーさんに言うのもあれだと思っさね」

「そうなんですかあ。でもすぐ付き合うことはないですよあ」

「どういことさね」

「互いにどうい性格なのか知ってから遅くないと思っんですよあ
そう問うと同時に俺はゆっくり目を瞑り、こてんと寝た。

「鬼は、気に入った奴のことは自分の者にしたくなるさね。あたし……いや、私にここまでさせたんだ。責任はしっかり取ってもらっ

そして俺を抱きしめるように自分も眠りについた。そして今に至る。
「酔ってご迷惑をおかけしたことで、失態も晒してしまい大変申し
訳ありませんでした」

「そんな小さいこと鬼は気にしないさね。あたしは役得もあつたさ
ね」

嬉しそうに言うが、俺はへこむしかなかった。

そして酒を飲み過ぎないように誓うのだが、鬼たちと接点を持った
ことで、何度か同じ事件が起きてへこむことになるのは余談である。

13話目 2度目の別れ

鬼とは喧嘩と酒が好きで人間を食らう。また卑怯と嘘を嫌い、正々堂々を是とする。

これはおまけだが、また仕事をしている鬼もいたりする。何故かを聞くと、長生きすると暇になってくるらしい。

そんな俺もこの里についてから1週間後から今日までの約50年、同じ仕事をしている。

小さいながらも料理屋である。ラーメンが一番の好評だが、それ以外にも酒やつまみや食事出している。

ちなみに店内での決まり事もある。残すな、店および周辺で喧嘩するな、つまみ食いするな。この3つを守らなければならぬが、あまり破られることはない。

そして今日。俺用の賄い飯を食べ、自滅した鬼が一名ほど脂汗をかいている。

「鬼、さ……ね」

つまみ食いをした挙げ句、俺のことを『鬼』と呼ぶのは最初の宴会に誘い、この里へつれてきた清澄氷芽だ。

「鬼は氷芽だし、家でもつまみ食いするなと言ってるのにさ。店でもだめなのに」

俺の賄い飯である鶏肉と豆の炒めものを食べたのだ。箸でつまんだ際に影に隠れていた炒った豆に気づかず、それごと口の中に入れてしまったのが原因である。

「そもそもそれは俺が食べるものだから。氷芽が食べるなんて考えてないのに」

「悪いのはその美味しそうな料理さね」

「美味しそうだから食べたよ」

こくり。と頷く。

「家で1人寂しく寝てる」

「鬼畜……」

「今晚の夕飯、炒り豆入りの献立がいいと思うんだけど？」

「いじめられたさねー」

そう言って走り去っていく氷芽。元気そうで何よりだと思う。

走りさって行くのを見届け店に戻ると、客3名がひそひそ話をして
いるのが聞こえた。

「兄さんって、人間だよな？鬼より鬼だぜ？」

「人間の感じしからないから人間だろうが、姐さんよりもおっかね
え」

「普段優しい奴がキレると怖いってことを覚えておこう」

「そこのお三方。炒り豆が余ってますから食べませんか？」

「……け、結構です。申し訳ありませんでした」

速攻で謝罪する鬼たち。鬼に鬼と呼ばれるなんて不名誉である。と
はいえ、原因が自分にもあるのは解っているが。

長である氷芽と一緒に家で暮らしているとか、鬼よりも強いとか、
宴会で鬼より飲んで飲ませるとか。

寝ているのを邪魔した鬼を逆さ吊りにして、日がよく当たる場所に
天日干しにしたり。

店の前で喧嘩していた鬼に注意したら逆ギレされたので、うつ伏せ
になるよう地面に投げ、馬乗りになって角を折ろうとしたり。

ちなみに角は折るつもりだったが、他の鬼たちが俺を羽交い締め
にするなどしたので止めただけだったりする。

「しかし、兄さんの料理はマジうめえ。うちの嫁に見習わせたてえ」
「簡単なものなら教えますよ？」

「違う違う。うちの嫁は激メシマズだからよ、白飯が青飯になると
か、焼き魚から変な触手っぽい何かが生えるんだよ」

「でもこいつの嫁美人なんだぜ。メシマズだけだな」

「美人につられて結婚しただけ。メシマズだけだ」

そう言って笑う2名。嫁持ちらしい鬼は悔しそうにしている。

「おめえら……正論だから言い返せねえ。くそう、兄さん酒追加だ」

自棄酒でもするつもりなのだろうが、まずは警告をしておく。

「……解りましたが、先ほどから皆さんの後ろに立っている方がいらっやいますので、喧嘩するなら店から離れてくださいね」

「……えっ」「」

「私のご飯がまずいっていうのは解ってるわあ。でも、いくらなんでも兄さんにその話を振るのは良くないわよあ？」

美人の鬼が鬼気を纏わせて立っていた。喋り方と口は笑っているけど、目は笑っていないかった。

「喧嘩は店及び周辺では禁止ですので」

「解ってるわあ。それを知らない鬼は殆どいないわよあ。お酒は出さなくてもいいわあ。あとお勘定はツケでいいかしらあ？」

「ツケが溜まってないのでいいですよ」

「ありがとお。じゃあ、逝きましようねえ」と言って3人を連れて行って出て行く美人鬼嫁。

「ありがとうございました！。また来てください」

最後の客である3人が出て行ったので、店を閉めた。元々昼だけやってる店なので、今日は掃除と明日の一部の仕込みをやって終わりだった。

……もう、ここにきて50年なんだな。

仕込みをやっている最中、ふとこの50年を思い返してみる。

50年という年月は長いようで短かった。鬼たちと交流を持ち、時にはぶつかり、時には笑い、時には怒りもし、嫌だったことはないわけではないが、それでも楽しかった。

でも、長く居過ぎた気がする。元を言えば旅をしていたのだ。

俺は旅に出るか否かを考えることにした。

仕込みをしながら考えていたが、結論は出た。後は、話すだけだ。

「そろそろ、旅の続きに出るのさね？」

夕食を食べているときに氷芽にそう聞かれた。俺は無言で頷いた。

「やっぱりさね」

氷芽さんは持つていた酒入りのひょうたんを口に付け、中身を一気に煽った。

「……すぐ、出発するのさね？」

「1週間後に出る予定。店の片づけとかもあるし」

そう返答すると、氷芽さんは無言でひょうたんの中の酒を一気に飲み、空になったであろうひょうたんを床に置いて、俺の目を見て言った。

「この里の鬼たちの中では、お前さんは大切な友であり、あたしの中では最愛の連れ合いだということを……忘れないでもらいたいさね」

はつきりとそう言うてから「涼みに行ってくるさね」と言っで氷芽は出て行った。

俺も鬼のことは友だと思ってるし、氷芽のことは好きだ。

……次の日の朝に友と思っでいる鬼らから『宴会』という厳しい仕打ちを受けるわけだが。

「どうしたさね。主役はおまーさんなのにそんなに遠慮することはないさ。たくさん飲んで騒ぐさね」

「いや、俺が宴会であまり飲まないのは知っでるでしょう？」

「おまーさんと宴会を初めてやっでから生まれた鬼（子）もいるさね。そいつらはおまーさんが何で宴会に参加しないのか知らないさね。だから教えてやるさね」

そんな理由かと思ひ、回れ右をして帰ろうとしたが、「……あとはみんな思ひ出として残したいさね。飲み飲まされた思ひ出をさね」と言われたため、俺はため息と苦笑と共に、「潰しても知らないよ？」と言っで、「覚悟の上さね」と言われた。

結果は推して知るべし。評価を幾つか並べると、「昔より酒強くなっでるなあ。暴走するまでの量が多くなっでらあ」「昔より艶っぱ

いな。思わず襲いそうになったが、姐さんの目で我に返れたよ」「……兄さんって、酔ったらああなるんだ」「だから宴会はあまり飲まなかったんだ」など、決して喜ばしいものではなかった。そんな宴会が日々続き、気が付いたら旅立つ日は明日になっていた。饞別にたくさんの食べ物と酒をすでに貰っていた。「明日渡さないのか？」と訊ねたら、姐さんと兄さんの2人にさせたいとのみんなの気遣いだった。

その気遣いに甘え、2人だけで飲んでいた。

「2人でこうやって月を見て飲むのはいつ以来さね」

「10年くらい前かな。あとは家で飲んだり宴会が多かったから」

「10年か……今度は、いつ2人で飲めるのだろうさね？」

「……約束できないから困るな。広く見えるこの地でも、山や海を越えれば広大な大地があることを知ってるから。冥界や地獄を見ることになるのかもしれないけどね」

「笑えないさね」と、苦笑いをして氷芽は答えた。

それから俺たちは無言で酒を飲むが、ふと氷芽が「明日からは寂しい生活になるさね」とつぶやいた。が、まだ続きがあった。

「あたしに子でもいれば違うんだろうけど、おまーさんが意図的に当たりの日を避けてるんだからなあ。よし、もしも何か言われてもあたしがぶっ飛ばす……だから、覚悟を決めてだ。あたしにお前の子を生ませてくれないか」

参考までに言うと、俺はこの真摯な提案を受け入れた。そのあとどうしたかは、想像通りのことになったのは言うまでもない。

14話目 うそつきつさぎ

「もう行くのさね？」

「そうだね。でも1日遅れたけど」

遅れた理由は氷芽が号泣し、泣き疲れた氷芽が俺を抱きしめたまま寝てしまい、出発どころではなくなった。

「す、すまないさね」

申し訳なさそうに氷芽は言うが、俺は特に気にしていなかった。

「怒ってるわけじゃないから。むしろ昨日出てたら雨に当たって風邪引いたかもしれないし」

「そう言ってくれるとありがたいさね」

氷芽が若干湿っぽい顔をしたので、俺は氷芽の左右の頬をむにと引っ張る。それから上下左右に動かす。

「ふあふいおふるふあふえ？」

「笑顔で見送れ。湿っぽくなんな」

「ふあふあつふあ、ふあふあつたさね」

頬をさすりながらじとつとした目で俺を見る。その後はきちんと笑顔になったので良しとしよう。

「その笑顔。じゃあ、俺は行くよ。また何時か飲もう。そのときまで元気で」

「おまーさんこそ。死んだらダメさね」

「俺も死ぬつもりはないよ。でも、氷芽も同じ。死なないで」

「解ったさね」

氷芽はそう言うってから、俺を抱きしめた。俺も氷芽自分の方に引き寄せるように抱きしめた。氷芽のあたたかさを忘れないようにするために。

しばらく抱き合った後、氷芽は離れようとしたが、俺は氷芽の両頬を手で挟むように固定する。そして自らの顔を近付けてキスをする。おまけに舌を入れ、絡ませる。氷芽の唾液が増えたなと感じたとき

にゆっくりと離し、耳元で「またな」と呟いた。
顔を真つ赤にした氷芽が「……やっぱり、鬼さね」と言うが、俺は
無視し俺は氷芽に背を向け、手を上げた。
俺の旅は、再び始まった。

それから数日は何もなかった。いや、厳密に言えば妖怪が俺を襲おうとしたことが何度かあったが、結果から言えば返り討ちにし、一部の妖怪には二度はないとの警告し生かしてやる。

残りは殺したが、後悔やショックなようなものもなかった。以前なら何か思うことがあるのだからうけど何故だろうか？

年齢が理由か、はたまた別の理由かを考えながら歩いていると、海独特の潮の匂いがしてきた。

見た海は驚くほど透き通り、見たことがないほど綺麗だった。

「そう言えばじっくり海を見た事ってないな」

海で泳いだ記憶もなければ、何かの理由で長い時間海を見ることがなかった。

「折角綺麗な海なんだからじっくり見るか」

ぼんやりと座って海を眺める。

足もとを見ると、波は打っては戻りを繰り返している。あ、小さい蟹が流された。

遠くを見ると飛び跳ねる魚の群れがいた。群れをなんとなく目で追っていくと、そのある岩の山に倒れている人らしきものが見えた。見間違いじゃないことを確認するため、もう一度注視する。間違いなく岩の山に誰かが倒れてる。

「行き倒れじゃないよなあ、あれ」

もし本当に行き倒れなら砂浜に倒れているはずだろう。行き倒れそのなのにも関わらず、体力を使ってまで岩の山に上ることはないだろう。

そうなるよ、故意だろうか？

「考えてても仕方がないか」

俺は取りあえず行き倒れ（仮）のところまで歩いていく。が、行き倒れ（仮）に近づくにつれて解ったことがある。

僅かながらに妖力を感じているのだ。ワケありの可能性が出てきたので、念のため警戒を強めながら近づいた。

無事に岩の上に辿り着くと、そこには全身裸になって倒れている少女の姿をした妖怪（仮定）がいた。

間違いなくワケ有りだろうと思うけど、倒れているのを見てしまっているのに見殺しにするのも気分が悪い。取りあえず「おい」と声をかけてみるが反応なし。揺すってみても反応なし。

ふと視線をずらす。

ふわふわで柔らかさそうで、とても色白で、繊細そうで、気持ちよさそうなの「それ」に釘付けになる。

「それ」は悪魔の誘惑だった。おまけに「それ」の魅力はとてもやさまじく、抵抗できなかった。

俺は悪魔の誘惑に乗り、警戒しながらも柔らかさそうでそれを撫でるように触ってみると、少女はぴくりと反応がした。だが、起きなかった。

俺は「それ」の悪魔の魅力に虜にされてしまい、少女が起きないことをいいことに再び触る。

触る、動く、触る、動く、触る、動く、触る。

「ああ鬱陶しい！なんなのアンタ！人間のくせに弱っている無防備な私の耳に触るなんて」

少女は怒りながらそう言って、傷だらけの割には元気よく跳ね起きた。

「（最初は）傷だらけで倒れてたから声をかけたんだけど？」

「だからと言って耳に触るのはどうなのさ。まあいいや。それはいいとして、これは全身に付いた傷を治すためにやってるんだから倒れてない。解ったらほっといてほしいんだけど？」

少女（全裸）の体にはざつと見て無数の傷があり、浅いものから深いものまで見えた気がしたが、そもそもどうしてここにいるのか解らなかった。

「海水を浴びたままなんて傷悪くするだけだと思っけど？海水や塩水で傷口を洗った場合、その後は井戸水や池の水で洗ってから傷薬を塗ったり、池に生えてる蒲がまを地面にたくさん引いて転がって治すのが普通なんだけど？」

俺の話聞いて目を見開く少女。ただし全裸。

「本当？」

「悪くするのは本当。傷の治し方は鬼から聞いた話だから間違っていないと思う」

『切り傷擦り傷を治すのはこれがいい』と言っていた方法だ。一部の鬼が怪我をした場合にやるらしい。これをやらないと、傷が治るのに2日かかるらしい（やれば1日で治るらしい）。

「だったら信頼できるわね……ねえ」

「何？」

この少女が何を言おうとしているかは想像はできたが、とりあえず話を聞くことにする。

「傷治すのに必要な材料集めてよ。ほら、私ここまで弱ってるし、アンタ人間にしては妖怪並みに強そうだし、襲ってきても返り討ちにできるでしょ？」

ハートがつきそうない方&予想通りだった。

「まず、何でそんな傷ができたか聞こうか？嘘付いたら、ね？」

「解ったから！解ったからその笑顔止めて！怒るよりも怖いから。んと、あの島からここまで戻る手段がなかったから、海岸で仲間の数についてもめていたワニに『私が数えてあげるから、仲間を集めてきてあの島まで並んでくれればその上を踏んで走りながら数えて渡る』って言って、ワニの列の上渡ってきたの。こっちの砂地に下りようとしたときに『ワニ共は簡単に騙せる。ちよるい』って口が滑ったのよ。そしたら最端にいたワニが、私を捕まえてこんな

したの」

余りにも馬鹿らしい理由にため息を吐く。

「ここまで弱っているか弱いウサギ妖怪を助けてくれてもいいじゃない。あんた強いんだし」

少女は服を握っている手に力を入れてきた。だが、俺は冷たく手を振りほどいた。

「……そんな態度だったら手伝う必要はないね。俺は旅を続けるよ」
「ちょ、ちょっと」

少女は再び俺の服をつかむ。

「ねえ、アンタ強いんだからさ」

だが、俺の答えは同じだった。俺は再び手を振りほどいた。

「じよ、冗談でしょ？」

「本気だよ？」

俺が本気だと悟ったのか、ここで少女は焦りを見せた。さらに意識的なのか無意識なのかは解らないが、少女が俺の服を握る力が上がっていた。

少女が握っている手を振りほどこうとしても、ぎっちり握っていて離れる様子がない。

強制的に離させようと思ったところで、俺の服を掴んでいる少女が小刻みに震えていることに気がついた。気がついたと同時に、少女は掴んでいる服をさらに強く握り、俺の方を見上げて言った。

「私は死にたくない！まだ生きていたい！私のような弱い妖怪に解る！アンタは人間であっても強い！でも、人間だからって舐めてた！でも、それは私の妖怪としての意地だった！今は生きるために地面に頭をこすってでも！生きるためなら！謝罪でも土下座でもする！」

そう言っつて、岩に頭をこすりつけるように少女は土下座をした。

「だから、守って、よ……今、こんな状態、だから。まだ、死にたく、ない、から」

乾いている岩の上にぼたり、ぼたりと滴が落ちた。

少女は泣いていた。さっきまでの高慢な態度ではなく、紛れもない弱さ（本心）を見せた。

俺は再びため息をつく。そもそもこの少女には『やっていない』ことがある。正しくは『前提』が間違っている。

「お前、勘違いしてないか？」

「かん、ちが、い？」

少女はぼろぼろに泣き崩れた顔を上げた。

「そもそもお前、俺に『お願い』をしてないんだよ。『やれ』ってしか言っていないんだよ」

「おねが、い……？」

「手伝って欲しい、守って欲しい。だとしたらお願いしないと駄目。解ったなら言えるよね？」

少女は涙を拭い、鼻をすすりながら「蒲集めの、手伝いと、わたしを、守って、お願い」と言った。

「守ったとしても、俺が失敗したら死ぬよ？生きていたいなら、やり生かせることができる可能性を探すべきじゃないの？」

「あんたが、しっぱい、した、そのときは、あきらめる。いまは、あんたしか、ため、ないから」

俺は「そうか」とだけ返答し、一旦深呼吸をしてから「なら、引き受けるよ」と答える。

俺の返答を聞いた少女は途端に笑顔になり、安堵した様子で「よかったあ」と言った。

だが、次の言葉は俺にとって聞き逃せるものではなかった。

「あの森に、きし、もじんの、夫を、名乗る、強い妖怪が、住みついたの」

「……今、なんて言った？」

多分、この世界に降り立ってから数度しかなかったことがない表情になっっているだろう。そんな表情を少女には見せないようにする。

「悪いけどかなり重要なことだからさ、もう一度言ってもらえる？」
少女に背を向けながら聞く。

「強い妖怪が、住み着いた？」

「その前」

「鬼子母神、の夫を名乗る？」

「そいつの種族は？」

「よく、解らない。聞こえたのは、声だけだから。それが、どうしたの？」

「いや、それが本当なら」

まず間違いなく、如何なる手段を用いても、殺す必要がある。

だが、その言葉を言うことはせず、表情を元に戻して「怖いよな」と答えるだけで終わらせた。

15話目 虎の威を借る妖怪

俺が蒲を集めている間に、てみには自分の身体を洗っておいでもらうことにする。蒲を集めて地面に敷き終わつた後、身体を洗い終えたとてみはやつてきた。

「少し遅くなつた？」

「別にそんなでもないかな？それはそうと、蒲は敷いておいたから寝転がって」

蒲の上にてみが寝転がり、俺が上から残りの蒲をてみの身体にかけ、蒲がとばないように薄い毛布をかけておく。

「あとはこの状態で2日か3日寝て、様子を見ればいいかな」

「うええ。まあ、そうなつちやつたもんは仕方ないけどさ」

げんなりとするてみを余所に、侵入妨害と検知の2つの結界を張る。張り終えてから、俺は野宿の準備をする。準備と言っても、雨を防ぐためのものを張るだけで終わりだけど。

張り終えたら今度は食事の準備に取りかかる。忙しい俺の横で、てみは「……暇」と呟いた。呟きがすっかり聞こえたので殴りたくなつたのは余談。

「暇なら食事いらナイよな？」

「いるから。暇だつて言つたこと謝るからちようだい」

上半身を起こしてまで謝るてみに、作っていたものを手渡す。

「なにこれ？」

「麦を練つて焼いたものに味付きの鳥肉と野菜をはさんだもの」

俺がてみに渡したのはサンドイッチもどき。パンと言うよりはنانの生地を伸ばして焼いたようなものだ。

「おいしい」

「そうか……だけどてみ。がつついて食べてるから口に食べカスついている」

「えっ、嘘」

てゐる口を手の甲でこすろうとするが、その前に俺がカスを取る。

「なんだか、お父さんみたい」

「今現在2児の実父と1児の義父の可能性があるんだよね」

という俺の返答は、てゐを引かせるのに十分なものだったらしい。

その証拠に「ちょよ、私も……」などと言っているの、「それはない」と即答しておいた。

父親関連の話題のせいかわ、食事を終えるまでと終わってからしばらくは会話はなかった。

再び会話をしたのは、誰かが俺の張った結界を越えてきたときだ。

俺が「誰か結界に侵入したね。感じる妖力が強くなってるから、こちに来てる」と言っていると同時にてゐは上半身を起こし、「……本当だ」と言った。

徐々を感じる妖力が強くなってきたせいか、てゐの顔は青ざめ、身体は震え、歯をかちかちと鳴らしていた。

「大丈夫。なんとかするから」

「でもっ、でも」

「負けないからさ。取りあえずてゐの周りには結界張るから。あとは、ゆっくり寝て待ってて。悪いけど、術で寝てもらおうよ」

上半身を起こしていたてゐの身体は前のめりになるが、俺が支えてそれ以上前のめりにならないようにする。ああむけに寝かせ、てゐの周りに結界を張る。

「ミツケタゾ、オレノメシ」

結界を張り終えると同時に侵入者が姿を見せた。姿形はほぼ人間だが、顔は口の裂けた猫のような顔で、ぼろぼろの甚平のような物を着て、毛むくじやらの妖怪。

尻尾は1本しかない。ということは、大した実力はない。

「オレノコトガコワイノカ？ソウダナ。ニンゲンハオレタチニオソレヲナスカラナ」

考えていた間の沈黙はこいつにとって『人間が恐怖している』としか見えてないのだろう。

「そもそも俺はお前の餌になるつもりはないしね。そういえばこの辺りに住んでいるっていう鬼子母神の夫って誰のことか知らない？」
「オレノコトダガ？」

ああ、こいつだったのか。
途端に俺の心は冷たくなる。冷たくなるが、表情は変えずに次の質問をする。

「ふーん。ちなみに鬼子母神の名前って知ってる？」

「オマエゴトキニオシエルヒツヨウナドナイ」

「あつそ。じゃあ、清澄氷芽って名前に聞き覚えは？」

「シランナア」

ニタニタと喋る妖怪。

これで完全に証明された。こいつは、間接的にも鬼とかかわり合っていないと。

「鬼子母神の名前を夫を名乗るなら知らないという事はない。つまりお前は鬼の接点はない。夫というのも嘘。こんなことをしなくても解ったけど」

「ニンゲンガナニヲヌカスカ！」

目の前の侵入者が激昂した様子を見せるが、俺の反応は冷ややで、挑発的だ。

「おお怖い怖い。お前は許されない嘘をついてまで何をしたいんだか。まあいいや、お前みたいなクズに鬼たちと交えた拳を使うのは勿体ない。だから消える、クズが……つと、クズに失礼だったな」

「ホザケエエ、ヨウカイノシヨクリヨウフセイガアア」

さらに激昂し、俺を喰い殺そうと突っ込んでくる妖怪。俺はその場に立ち上がり、溜め息をついた。

それはあまりにも単純すぎる行動への呆れ、そしてあまりにも思い通りに事が運んだせいだ。

「グエ！」という妖怪の声。その妖怪は地面に張り付くようにうつ伏せになっていた。

仕掛けは単純。重力と圧力を操作しただけだ。

16話目 素直になれないで

妖怪を焼き尽くした翌日。てゐが目をゆっくりと目を覚まし、突然がばつと跳ね起きた。跳ね起き、すでに起きていた俺の肩を掴み、前後に揺すりながら「あいつは？」と聞いてきた。

前後に揺すられ続けるのもあまり気持ちよくないので、てゐが掴んでいた両手をゆっくり離し、あらましを説明する。

説明を聞いたてゐは「無事でよかった」と呟いた。途端真っ赤になり「自分が無事ってことだから！」と照れ隠しの台詞を言った。

俺は「そうだね」とだけ返答すると、てゐは面白くなさそうな表情をする。

「それだけ動ければ明日には問題なくなるかな？」

「あ、うん。そうね」

何か残念そうな表情を浮かべるてゐ。何が残念なのかまでは解らなかった。多分、今聞いたところで『誰が残念そうにしてるのさ』と返されるのは目に見えている。

明日までに解ればいいか、と後回しにし、今気になっていることをてゐに聞いた。

「……何か言われるの承知で言うけど、服はどうしたの？」

すると残念そうな表情が一変した。

「忘れてた。破られちゃって今服がないんだよね。裸見られたのは

……まあいいや」

いいものなのかと思っただが突っ込まないでおこう。そうは言うもののこのままではよくないだろうと思っただので、「服作ろうか？」と言う。

「え？誰の服を？」

「てゐの服。というわけでどんなのがいい？」

「いや、そこまで世話になるわけには」とてゐは遠慮したが、「気にするな」と返す。てゐはしばらく葛藤した結果、「……頭からす

つぼり着れるのがいい」と遠慮がちに言った。

とはいうもののどうしたものが、とデザインについて没頭していたら、暇な現状に飽きたのか「アンタは何で旅をしてるの？」と聞いてきた。

「忘れた。覚えてないということは、大したことじゃないと思う」

「ボケた？」

そうか。そんなことを言いやがりますか。

俺はにつこりと笑いながらるに近付くと、俺はてめのデコを右手でわし掴み、右手の握力を徐々に強くしながらるを宙に持ち上げた。

その後てめは、俺の所謂アイアンクローでダウンしたのだった。

「服こんなもんか？」

ダウンから回復したてめに作った服を見せる。作ったのは桃色っぽく、頭からすっぽりいける服だ。

「いい！着心地も丈もいい！」

試着した服は好評だったが、「……でもこの首飾りは何」と、手に持っているニンジンの形をした首飾りを俺に見せた。

首飾りはなんとなくて作ってみたものだ。首飾りにはあまり意味はなかったが、普通に返答するのも面白くなかったので、疑問符つきで「お守り？」と言った。

「疑問形にしないでよ。でも、力を感じる」

「何も力入れてないから怨念かもね」

「恐っ。本気で恐っ。でも気に入った。ありがとう」

どう考えても恐そうじゃない嬉しそう表情で礼を言われた。くるくるとはしゃいでいるてめだったが、足をもつれさせて転んでしまう。転んだと同時にビリッという嫌な音もした。

てめを見ると、転んだてめと、着ている服が腰辺りで破れているの

が見えた。

てゐはしばらく動かなかつたが、恐る恐る自分の服を見る。がたがたと震えながら俺を見る。

「あー、怒ってないから。あと服直すからこつちに来て」

てゐは無言でこつちに来る。服の様子を見る。恐らくは転んだときに服を巻き込んだ可能性があり、結構広範囲に破れていた。

破れた部分を完全に直すこともできたのだが、いろいろあつて、てゐには悪いが、結局は腰の破れた部分から上と下に分けることにした。

「折角作ってもらつたのに。破つちゃつてごめん」

「気にするな。でも、また転ぶなよ」

「酷つ。って言いたいけど言えない」

その言葉を聞いた俺が笑うと、「笑うな！」と抗議されたが、笑いが止まらなかつたので、てゐは不貞寝をした。

それから何もなく、俺が火を消して寝ようと思つたとき、てゐが「まだ、起きてたの？」と声をかけてきた。俺は「今寝るところ」と返事をする。

返事を聞いたてゐは無言だったが、意を決したように話し出した。

「アンタと会つて2日、たつた2日だつたけど、私には一生忘れられない2日になった。妖怪を恐れず、妖怪を葬る強さを持つものにも関わらず対等に見る不思議な人間。何の得もないのに旅を中断してまで私のことを守ってくれた。ご飯もくれた。蒲も集めてくれた。

服まで貰つてさ。なんか恩返しできればいいんだけど、今の私は何もできない。でも、」

てゐはひと呼吸置き、

「ありがとつ。と言うことは出来る。本当に、ありがとつ」と、俺の目を見て、はつきりと言つた。

だが、すぐにてゐの顔が真っ赤になり「じ、じゃあ、私寝る。おやすみ！」と言つて照れ隠しのためかそっぽを向いてしまった。

俺は余計なことを言わずに、「礼を言われることはしてないさ」と

だけ言った。

17話目 またね。

翌朝、俺とてゐは食事をあの場所から離れた。俺は旅に出ることをその場で言ったが、てゐが「見送りに行くから、一緒に行く」と言ったため、もう少しだけ一緒にいることになった。

「アンタはこれからどこに行くの？」

「決めてないね。どこかいいところないかな」

「私に聞かれても困るけど、なんだかんだ言ってもアンタならいいところに着くんじゃない？」

道中そんな他愛もない会話をしながら俺たちは歩いていった。しばらく歩くと、潮風の独特なおいがなくなってきた。

全くなくなってきた辺りで俺はてゐに「見送りありがとう。ここままでいいよ」と言った。「……そう」と言いながらてゐは寂しそうな顔をする。

「ほら、寂しそうな顔をするなって。生きてればまた会えるから」

「そう、だよな。私も絶対生き続けるから、アンタも生き続けて。」

「いい！約束だから！絶対だからね！」

と語気を強くして言った。俺はてゐの言葉に「解ったよ」と短く一言返した。

「じゃあ、そろそろ行くから」

「ちよ、ちよっと待って」

別れを告げようとしたところで、てゐが俺を服の袖を掴んで制止する。

俺は「どうしたのさ？」と尋ねるが、てゐは深呼吸をしている。覚悟を決めるかのように深呼吸をしている。

1回、2回、3回と深呼吸をして心は決まったらしい。てゐは再び俺を見上げる。

「アンタが生き続けるようにおまじないするから、ここにしゃがんで」

どこか落ち着きがないような感じがしたが、俺は言われたとおりにしゃがむ。しゃがんだのを確認したてゐは、「目を瞑って」と言うので言われた通りにする。

ゆっくりと3を数えられる程度の後、額に暖かい感触がした。「目を開けていいよ」とてゐ。

目を開けたてゐは顔が真っ赤だった。何をしたかはなんとなく解った。

「いろいろありがとう。それじゃあ、私はもう行くから、またね」
照れ隠しのためか、まさに脱兎の如く走り去って行ってしまった。

「またな。てゐ」

きちんとした別れを言うことは出来なかったが、いつか再会できると信じ、俺も歩き始めた。

1章あとがき(ちょっとネタばれ)

ここは章が終わったあとがきとなります。読む必要がないと思う人は次の話へお進みください。

(結構文面ありますので、注意)

『幻想郷へ来たようです』を読んでいたいてありがとうございます。Rizilyです。

プロットを存在させずに話を自由気ままに作るというものも大変です。でも楽しいです。

感想や評価をいただけるなんて思ってもいなかったので(ついても評価低いだろうなあ)とびっくりしたりしています。

この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございます。

それなら他の作者さんもやっている手法として、各話の『あとがき』に書けよ。

そう思われるかもしれませんが、『話の最中に余計なことは書かない』ということを決めているので、今後もそれはないと思います。たぶん。

それでも見たいという素晴らしい方は、何話かごとくらいには『活動報告』の方にあとがきというか、そういった話を書いているので、そちらを見ていただければと思います。

さて、幻想郷へ来たようですの内容になりますが、反省点もいくつかあったりします(プロットない以外で)。

『クオリティ落ちた?』

……精進するだけです。頑張ります。うん……

『あれ、シリアス続いてね?』
なるっただけ排除しようとしているのに、書いた後シリアスっぽくな
っているのはなぜだろうか?
これも頑張るしかない。

『幻想郷まだ出てねえのに、幻想郷に来たようですってマズくね?
アーアーキコエナイ。』

『ペース遅くね?』

ペースについては、『諏訪神奈編』<『氷芽編』<なんか壁<『て
る編』という感じで書きにくかったのですよ。なのでペースがてゐ
登場後がつくり落ちたのが現状だったり。今後頑張るしかないなあ

……

『原作キャラ少なくなかね?』

ぶっちゃけて言うと、1章の軸は紀元前の話ですので諏訪大戦と
因幡の白兔との二つを挙げています。どっちも日本神話を辿ってい
たりするですよ。ちなみに氷芽は日本神話関係なしに行ってます。

反省はこんなところですね。叩けばまだいっぱい出てきそうな気は
しますが、悪い事を書きまくと気が滅入るので勘弁してください。
ちなみに2章は……これを投稿後、文章構成をチェックしてから投
稿となります。

それでは、今後も読んで戴けることを願って。R i z i n y でした。

18話目 託されたもの

てみると別れてから5年経った。

『空飛べば楽じゃないか?』と軽率に思っただけを見て飛んでいたために、結構な距離を飛んでいた。

地面に降りてから少し歩いて、たまたま近くにいた人に話を聞こうとしたら言葉が通じないことが発覚。

困ったなと思いつつ言葉や風習を学びながら1年過ごし、日常会話程度なら可能になった。ここがどこか解るまでにさらに2年。色々余裕がでるまでにさらに2年の合計5年。5年でかなりのものを見聞きできたので、これからどうするかを考えながら森を歩いていた。

そろそろ日が傾いてきたので野宿出来る場所を検討している最中、悲鳴が聞こえた。何かと思って悲鳴が聞こえた方向に進む。

目に入ってきたのは、なまくらな刃物で身体を斬られたような裂傷を負い、矢が刺さっている人が何かを守るようにうつ伏せになっている誰かのと、周りを五人ほどの男が取り囲んでいる姿が目に入る。男たちは口々に罵倒を続け、最後の男は、

「ったく、手間取らせやがって。このクソが」

と罵倒を浴びせ、傷を負っている人を蹴飛ばした。「ああっ」と痛みを耐えるような声を上げ、仰向けにさせられた。うつ伏せになっただけで守っていたのは赤ん坊だった。

「てめえみてえな化け物がいぢやなんねえ。もちろんそのガキもだ」泥棒だったら放置しているのだが、『化け物』という単語から、この2人がなんらかの形の『迫害』を受けたと男の言葉から推測できる。

なにがあったのかは解らない。関係ないと立ち去ることもできたが、危ないかもしれないが、ここまで見てしまったから放っておくこと

はできなかった。

俺は木の枝をわざと折り、音に反応した男たちはこちらを一斉に見た。男たちは怪訝な顔をしたが、俺は無視して女性の元へ行きしゃがみこむ。そして気づいた。

どう見ても致命傷だが、辛うじて生きていること。そして、僅かながらな妖気を感じたこと。

男たちが言う『化け物』は当たっているが、妖力が低い。恐らくは穩便に暮らしていたのはまず間違いない。

つまり、人間の身勝手でごうなつたという結論に至つたということになる。

俺は立ち上がり、男たちを見る。

「あんだあテメエ？その化け物親子を庇うんなら容赦は……」

「化け物？どう見てもこの2人は穩便に暮らしていたとしか思えないんだけど？」

「はあ？だからな、そいつは化け物なんだよ。だからどけと……そうか。てめえもお仲間だから庇うのか」

男は自分で納得しながら反吐がでるような笑みを浮かべた。そんな笑みを浮かべながら、「だったらてめえもぶつ殺す！」と怒鳴つた。それが合図になり、男たちは自分たちの獲物である剣と弓を持つている男2人は短剣を構えた。俺はそれを見ながら溜め息を吐く。

「この人たちに対しては一方的に攻撃をしたんだろうけど、できないこともあることを認識するべきだね」

俺は木の枝を2つに折り、短剣を持った2人の肩に狙いをつけて、木の枝が刺さるように投げた。木の枝は吸い込まれるかのように1人の右肩ともう1人の左肩に深めに刺さる。

一瞬、木の枝がささつた男2人は何があつたか解っていなかったが、どうなつたか認識できたようだ。その直後、悲鳴を上げた。

「アアア、肩、肩がアア」

「痛え、痛えよお」

2人は痛みに倒れ込み、さらに大げさにうめき声を上げる。

「枝だけで……あんなことできるわけねえ。ば、化けもんだああ。妖術使いだあ。殺さないでくれえ」

「ああつ、ああつ、ああああ」

残る3人のうちの2人は恐怖に駆られ、武器を捨てて逃げ出した。残りの1人は、2人が逃げたことを見向きもせず、俺を見ている。

「てめえも……化け物か」

「俺は正真正銘お前達と同じ人間。それを化け物と言うならお前達は何？」

「……くつ。そいつを庇ったとこでいいことはねえぜ」

捨て台詞を残し、怪我を負った2人を連れて去っていった。男達がいなくなったことを十分に確認すると、倒れている女性に「生きている？生きているなら返事をして」と呼びかける。何度か呼びかけると僅かな声。

「あ、……あいつ。ら、は？」

「もういない。それより意識をはつきり持って、治療をするから」俺の問いかけに女性は弱々しく首を横に振る。

「もう、私。は…持たない……です…から。そ、れより。この。子を……」

彼女にとって見ず知らずの俺に、彼女が命がけで守っていた赤ん坊を俺に差し出した。

「…あな、た……になら……この…子……、わたし。の、むす。めの、メイリンを……」

「俺はあいつらと同じ人間だよ。その子を殺すかもしれないのに預けるの？」

冷たい言い方だが事実だ。だが、目の前の女性の考えは違ったらしい。

「…あいつら、は。……私。たちを…化け、物扱いした…けど………あなたな……ら……信用………できる」

片言だが、そう言いきった。そこまで信用されたなら、俺も応えられないと思った。そう思ったから、俺は彼女から赤ん坊を受け取

った。

「出来る限りやりましょう。それで貴方の、名前は？」

「ほ、ん、りん……ふぁ」

「ホンリンファか。覚えておく」

「……あり。がとう、メイ。リンには、だめ、なははおやで。ごめん、なさいと……つたえ、て。……あと、これ。を」

リンファは自らかぶっていた帽子をメイリンの身体の上に乗せた。

それは彼女の最後の力を振り絞ったこと。

赤ん坊のメイリンはそれを知らずに、母親の帽子を見て喜んでいる。

「みず。しら、ずの方……すみ……ません……」

「気にしないでください」

「あり。がとう。あな……た……いま…………そっち、に」

彼女は安らかな顔をして、徐々に目を閉じた。

それは、ホンリンファという女性が息を引き取った瞬間だった。

俺は彼女の冥福を祈りながらも力を使い、彼女を埋葬した。

19話目 こそだてにつき

メイリンを育て始めて1年目。

ミルクは持っていた食材を赤ん坊に与えても問題ないように調整し、力で作り出したほ乳瓶に入れて与えたり、おしめを取り替えたりする。

1年目の後半にはミルクから離乳食に切り替えて与える。

危なくない環境を作り、メイリンをはいはいさせたり、掴まり立ちなどをさせる。

2年目になると、「としゃ」と呼ぶようになり、よちよちと歩き出す。離乳食から、少しづつ普通の食事に近付ける。

3年目には少しずつ喋れるようになる。排泄のしつけもだいぶ終わり、おしめも取れる。ときどきおねしょをするのが玉に傷。

4年目になると、いろいろ興味が増えてきた。夢を聞いてみると、「とうさんのおよめさんになる」とにつこり笑って言った。「大きくなったらな」と定例句を言う。このときから少しづつ文字を教えていく。

少し期間が開くが、7歳から自衛ができるようにと少しずつ武術と気の扱いを教えていく。才能があつたのか飲み込みがすごく良いから教えがいがある。

特になにもなくメイリンが10歳の誕生日（俺がメイリンを引き取った日。数えではない）を迎えた日、「父さんのお嫁さんになれない」とわんわん泣かれた。泣きやんでからメイリンに「お嫁さんになれないから一生父さんの側にいる」と言われた。

15歳。真実を伝えた。「やっぱりか」と言つてメイリンは少し寂しげな顔をした……のだが、「でも、父さんの嫁になれるね」と、寂しげな表情が一変し、男ならたまらない身体に育つた美鈴に迫られた。死守した。

16歳を迎え、メイリンは「私の漢字の名前をつけてほしい」と言

ってきた。美鈴とつけた。

……気のせいかこのころから美鈴の俺に対する依存度がさらに上がる。風呂と寝床まで一緒になった。対策を練る。

17歳、対策が逆効果に終わる。それでも死守できてる。

20歳を迎え、独り立ちさせようと試みる。全部無駄に終わった。勘の良さがすごく、実行前に感づかれる。おまけに依存度がさらに上がる。マジでどうしよう。

21。嫌われるように仕向ける。失敗。いや、まだ諦めない。

美鈴25歳。美鈴の俺に対する思いが半端じゃなく、ついに策潰えた。

30歳を迎えた。俺が手加減をしてだが、ちょこちょこ俺に当てるようになる。武術だけなら中の下の妖怪なら素手で倒せる實力だろう。そのために美鈴に唇を奪われた。が、その後は死守した。

そして35年目……

「父さん、何してるの？」

背中に自慢の胸（本人談）を押しつけつつ、後ろから俺に抱きつく美鈴。柔らかい感触にはもう慣れた。

「美鈴の子育て日記を見返してた。いや、どこで育て方間違ったかと」

「そんなの付けてたの？育て方は間違ってたないよ。私が父さんの嫁になるのは間違いないしね。それに、父さんが好きそうな身体つきになったと思うんだけど。私はさ、父さんの嫁になるために生まれたと思ってる」

恐いことを言う娘に育ってしまい、亡くなった美鈴の両親に本当に申し訳ない。この1点だけはこうしてこうなったのかが理解できない。

「視野をもっと広くすれば俺よりいい男がいるだろうに」

「父さんが性格破綻者で顔が気持ち悪かったら考えるよ。むしろ父さん以外の人間の男は私のことをじろじろ見るし、妖怪は私のことは子供を生む道具としか見てないのが解ったし」

美鈴が言ったことは思い当たる節が多々ありすぎて俺は何も言えなくなる。

「人間は妖怪を愛してくれるとは限らないし、むしろ怖がられる対象だからね。父さん以外は」

「俺は例外」

「だったら私の愛を受けけてもいいよね。接吻はもつしたんだからそれ以上に進もうよ」

「どうしてそうなる」

迫ってくる美鈴をあしらう。最近では俺を押し倒す目的のためだけに力をつけてるんじゃないか？と思うときもあるほどに俊敏な動きをする。

決着は美鈴をうつ伏せにしてから、俺がアームロックをかけるまで続いた。

「まだダメかあ……父さんに勝てないなあ」

その言葉に対し、俺は「自分が育てた子にはまだ負けないうて」と言うと、美鈴は「むう」と唸った。

同じ年のある日の朝食後、「父さんが育った国を見て回りたい。むしろそっちに住みたい」と美鈴が言い出した。俺は「それまた何で？」と聞いた。

「色々な意味で出会いがないことが解ったから。……父さんより素敵な男は今も未来も見つからないけど」

後半の言葉がなければ完璧だったのにと内心思う。

「行くのはいいけど、空飛べる？」

「え？泳ぐんじゃないの？もしくは海の上を走るとか」

どれだけの距離があるか知らないのか知っている上で言ったのかは解らないが、現実的にやりたくはない。「どっちもできるけど距離がかなりあるから俺はやらない。美鈴がどっちかで、俺が横で併走

ならいいけど」と言うと、美鈴は「父さんと一緒じゃないから空飛ぶ練習をする」と即答だった。

その日から空を飛ぶ練習を始め、美鈴が割と安定して飛ぶことができるようになるまで4日。長時間飛べるかを俺が確認してできるだけ2日でなんとかあった。1年かかるかな？とも思ってたけど、美鈴の執念とも言える努力で6日で終わった。

すぐ行くこうと言いだした美鈴に対して、1日休息を取ることを告げた。

休息中はずっと俺に甘えていた美鈴。父離れをする気が一切無い。逆にかなり甘やかせば離れるかも。と一瞬思ったが、ろくな事にならないと予想できたので止めた。

もう一線を超えない限りはいいやと断念し、匙を投げることにした。……夜に密着して寝るのも気にしないことにした。

出発の日、美鈴の起床は早く、俺が目を覚ましたらすでに朝食ができていた。美鈴は問題無さそうだからいいけど。

美鈴手作りの粥を受け取り、粥を啜る。

「父さんはどこ行くとか決めてるの？」

俺は粥を啜るのを一旦止め、「神2柱の住んでる場所か、鬼の住処」と答えてまた粥を啜る。

「妖怪弾圧するような神じゃなければどっちでもいいかな」

「神は信仰の都合もあるから……最悪物理的に全力ズドンして絶縁すればいいか。じゃあ90年ぶりに会いに行くかな」

俺はそう言った後に、残りの粥を一気に流しこんだ。

20話目 久々の再開と暴走

「久しぶりだねえ。100年くらいか。時が経つのは早いねえ。つと、まずは一杯」

守矢神社に来て早々、俺と神奈子は酒を飲んでいた。再会を祝してと言いたいところだが、元は諏訪子と神奈子が飲んでいたところを邪魔したというところだ。

ちなみに今飲んでる酒は信仰してくれている人からの献上品で、今年の自信作らしい。

自信作と言っただけあって、確かに味も香りもいい。いいのだが……

「あれさえなければねえ」

俺が視線を少し右にずらすと、諏訪子と美鈴が言い合いをしながらガチンコ勝負をしている。

「うっわ。そんな貧弱な身体で父さんに迫ったなんて。無謀すぎです」

「貧弱言っなあ！それに受け入れてくれたんだから問題ない！そっかあ。お前はまだ相手してもらってないからひがんでるのかなあ？」

「それなら気にしてません。私にはまだ未来がありますし、身体も貴方の貧相な体型と違って父さん好みですから」

美鈴と諏訪子の戦いのせいで、せっかくの酒の味が全て台無しになっている気がする。あと大声で恥をさらすのは止めて欲しい。

神奈子を見ると同じように思ったのか、左手で右肩を押さえながら右腕を大きく回していた。すでに臨戦態勢だった。

神奈子はすっと立ち上がり、「私は諏訪子を押さえるから」と言う。俺は「じゃあ俺は美鈴だね」と言っただけで立ち上がる。

そのあとの行動は早く、諏訪子は神奈子からの腹への一撃で気絶、美鈴は俺からの頭への拳骨で気絶させた。

諏訪子と美鈴を適当な部屋で寝かせ、神奈子と2人で飲み直す。

「すまないねえ。諏訪子が挑発したばかりにああなって」

「受けた美鈴も悪いから気にしないで。悪いのはお互い様」

「そう言ってくれると気が楽だよ。さて、そんな酒の肴に100年ばかりの間の話をしようじゃないか。まずはこっちからだ」

守矢神社の100年。

大きな事はまずは諏訪子の懐妊。父親は俺。

この件は諏訪子の希望もあり、あえて大々的にはしなかった。

生まれたのは元気な女の子で、子育ての経験がない2人が四苦八苦して育てた。

子供が泣いたときは神奈子があやすと子供がすぐ泣きやむことが多く、諏訪子がすごい悔しがったようだ。

そんな子供も大きくなると守矢神社の巫女を勤め、勤めを果たした後は村の男を婿に取り幸せに暮らし、生涯を閉じたらしい。

ちなみに諏訪子が生んだ子供の子孫が村で暮らしているとのことだ。

「そのくらいかねえ。細々言うなら信仰が広くなったってことだけど……信仰が増えると私らの力も増すわけだ。力が増した諏訪子と美鈴……だったかね。ともかく名もない妖怪と互角に張り合うなんて思わなかったよ」

「諏訪子は全力じゃないでしょ。片や美鈴は全力だよ」

「とはいえあの子は40も生きてないのだろう？それであの強さなんて。あんたもそうだけど、世界は広いねえ。っと話は逸れたけどこっちはこんなものだよ。そっちはどうなんだい」

100年くらいの行動を思い返してみる。とはいえ、大きな事柄と言えばあまりない。

「仲違いで家出した親子のことを解決して、酒を飲んでた鬼を拳一発で下してから、その鬼に誘われたからついて行ってその鬼を抱いて、鬼を助けてからこの国を出て、赤ん坊だった美鈴を託された」さらっと鬼を抱いたと言ったせいか、酒を飲んでた神奈子は思いつきりむせた。

ゲホゲホやっている神奈子に「大丈夫」と言うが、内心は酒がかからなくて良かったと思った。

「爆弾発言すぎてこの有様だよ。それで、下した鬼ってのは最近悪さをしなくなつた鬼子母神かい？まさかねえ」

神奈子は冗談めかして言うが、俺が「その通りだけど」と認めると、神奈子は笑つた顔のまま空になつた杯を手からぼろりと落とした。

「鬼子母神って、私でも拳一発で倒すことができるか怪しいのに……やっぱり世界は広いねえ」

神奈子は落とした杯を拾い、汚れがついていないことを確認してからまたその杯に酒を注ぎ、くつと1回で飲み干した。

再度酒を注いでいる最中に、「そういえば、鬼子母神の妹の話は知つてるかい？」と聞かれた。

素直に「知らない」と返答した。

「どこかの神の部下……いや、その神の配下の将の妻だったはず。その性格は鬼の中でも苛烈で、常に他人の子を捕らえて喰らうつていう話さ」

「氷芽からは連想できないなあ。でもいずれその鬼とも会うんだろうな……」

氷芽との関係が続く限り、いつかその妹と必ず会う。会つたところでどう変わるわけでもないんだけど。

「……ところで鬼子母神って付いた由来って何だろう？母ってつくくらいだから、氷芽の妹につくのが普通のような」

「本人から聞いてないのかい。まあ、確か大したことない理由で、鬼の中で母親も恐ろしいほど強かつたんだが、その母親を破つたんだよ。で、鬼の中でも最強だから『鬼』の中ではその『子』も『母』も『神』のような存在だから鬼子母神」

どんな話であろうとも、古い歴史や神話は未来には正しく伝わることなさそうだと学んだ。

と学んだ後は雑談をしていた。

神奈子曰く、諏訪子の暴走が増えて止めるのが大変なこと。諏訪子が俺を探そうとして神社を飛び出そうとしたこと。諏訪子が仕事をよくサボることなど、諏訪子の行動がどんどん激しくなってきたい

て、村では『また洩矢様か』というのが流行り言葉になってきたとか。

「諏訪子で思い出したけど、2人ともなかなか起きてこないよね。美鈴はともかく、諏訪子は……なんもないよね」

そう俺が言つと、ぴしつと固まる神奈子。空気が冷え、神奈子の額には徐々に汗が見える。

「……すまないが、一緒に来てくれないか？」

「了承。取りあえず油断しないようにしよう」

俺たちは無言のまま、諏訪子の部屋の前まで移動した。

部屋の前に来て解る。邪念がひしひしと伝わってくる。いい予感はない。

「……なるようにしかならないねえ。それじゃ、開けるよ」

神奈子がそつと戸を開けて中を見る。俺も便乗して見る。

そこには無言で淡々と布団を敷いている諏訪子。1人で寝るには大きめな布団一式。枕の側に布を置き、最後に枕を2つ両隣に置いた。誰がどう見たつて、真夜中のレスリングの舞台としか思えない。

舞台の設置を整えた諏訪子は「ふふ、子供、束縛」などという言葉を呟いた。

俺は戸をそつと閉め、この部屋を嚴重に封印した。ヤバい言葉を言つていた諏訪子を外に出さないようにするために。

封印を施した後で諏訪子が封印されたことに気付いたようだ。

戸をどんどんと叩き「神奈子！何封印してるのさ！」と叫ぶ。

諏訪子の口から「馬鹿、封印解け、脳筋」など次々と罵倒の言葉が出てくる。

比例して神奈子の顔には青筋が見える。が、諏訪子には見えないから解らず、罵倒が続くかと思つたが、

「年増！おぼこ！行き遅れ！」

その瞬間、神奈子の顔から一切の青筋がなくなり、笑顔になった。笑顔のまま拳を握り、封印を施した戸を殴る。

ドオン、と凄い音がした後に、封印を施して強化した戸がメリメリ

メリツと木が割れる音と共に寢室に倒れる。

諏訪子と神奈子の対面である。

神奈子は相変わらずの笑顔。諏訪子は引きつった笑顔。事態の深刻さが良くわかつたらしい。

「あ、神奈子……濡れ衣、着せてごめん」

諏訪子が謝罪をするものの、神奈子の笑顔は変わらず。ついには笑顔のまま、

「よろしい。そこまで言うなら第2次諏訪大戦だ。覚悟はできたかい？ 祈りは済ませたかい？ 部屋の隅で震え終わったかい？」

と、死刑宣告を告げながら指の関節をぱきぱきと鳴らし、部屋に入ってしまった。

「た、助けて」諏訪子は助けを求め、訴えた。

しかし、現実是非常であった。

「却下」

と、神奈子に即刻却下された。ついでに俺が助けに入れない……いや、さすがに最後のは非道いから庇わないけど……ともかく上手い位置に神奈子が立ちふさがった。

俺はその部屋に超強力な結界を張る。神奈子が一旦振り返り、俺を見ると目は笑っていない笑顔を浮かべ、再び諏訪子の方を見る。

その後何があつたのか。えげつない暴力と外に僅かに聞こえる悲鳴。意識が戻つたらしい美鈴が悲鳴を聞きつけたが、あまりに酷い暴力に唾然としていた。

ちなみに余談として、神奈子のえげつない暴力の嵐に巻き込まれた諏訪子は療養することになった。

もうひとつ言うなら、神奈子だけで神事などを回さなくてはならなくなり、手が回らなくなった神奈子は俺に泣きついてきたことも余談だったりする。

21話目 復帰と過去と恥と

神奈子にボコボコにされた諏訪子が1年かけて完全復帰した。身体の傷はすぐに回復したのも、精神面の回復が長引いた。それだけ神奈子にボコボコにされたときのことがよほど怖かったらしい。

最初の頃は神奈子の姿を見るだけで諏訪子が悲鳴を上げ狂乱。神奈子が狂乱した諏訪子を止めようとするとより暴れたりして逆効果になったので、俺が美鈴が止めにかかったが、諏訪子も抵抗してくる。死なない程度に崇めてくるので最初の頃は美鈴がダウンしていたが、徐々に慣れてきた（抵抗力がついた）らしく、止めることができるようになった。

それはさておき、諏訪子が回復したので俺たちは旅に出る準備をしようとしたのだが、

「やだやだやだやだ！看病はしてもらったけど、一緒にになにかしてないもん。神奈子と1年一緒に仕事したんだから、わ・た・しとも一緒に1年仕事するべきなんだよ！」

旅に出ることを伝えた直後に、予想外にも諏訪子が凄いい駄々をこね出した。諏訪子の駄々のこねかたは徐々に幼くなっていき、「やだやだまだ行っちゃやだ」言いながら床に仰向けになって手足をばたばたさせる。

「私が言うのもなんだが、特に急がないならばらくいてくれないかねえ？勝手なことを言ってるのは解っている。けど、この通り、頼めないだろうか」

神奈子は俺に頭まで下げる。俺は別に構わないのだが、俺は美鈴の方を見る。

美鈴は俺の視線と何を言いたいかを察した美鈴が、「旅のことなら気にしなくて良いよ。父さんと旅をする時間はたっぷりあるから」と答える。

「じゃあ、もう少しだけお世話になるよ。迷惑かけるかもしれないけどよろしく」

「恩に着るよ。ほら、諏訪子。あんたから……」

神奈子が諏訪子の方を見て言葉を止めた。何事かと思ひ、俺も諏訪子の方を見ると駄々をこねた姿のまま、半目でじとつとした視線で俺のを見ていた。

しばらく諏訪子は俺をじつと見ていたが、ぱたりと両腕と両足を床に下ろした。

「視線だけで話分かるんだね。ふーん。ほーん。へー……目と目で解り合えるなんて……」

言い終り、諏訪子はむくりと立ち上がる。立ち上がった後じんわりと諏訪子の目が潤み出した。

「そんなのうらやましいんだからあゝ！うわあああん」

と、バリバリと障子の戸に突撃し、戸を破壊しながら部屋から出て行った。

諏訪子の奇行に対して俺は諏訪子が飛び出して行った方を見ながら冷め切った茶をずっと啜り、神奈子は溜め息をついた。

「俺が巫女さん呼んでこようか？」

「いや、私が行くさ。巫女に客に雑用させたなんて知られた日には私が怒られるからね」

神奈子は立ち上がり、巫女を呼びに行った。

「父さん」

美鈴が俺に声をかけてきたので、美鈴の方を向いた。

「父さんって、ここに住んでたんだよね？そのときの話が聞きたい」

「ん。ま、いいか」

俺は神奈子が戻ってくるまでの間、諏訪子との出会いから諏訪大戦のことまで美鈴に聞かせた。

「神奈子さんが侵略……今の神奈子さんからはとても考えられない。あと父さんがいたのに負けたなんて……」

「今と昔の神奈子の違いだけど最初はものすごくピリピリしてたね。」

あと俺が負けたって美鈴は言うけど、大将の諏訪子が負けたから負け。というか、諏訪子が『神奈子との勝負に口を出すな』って言ったから俺は神奈子と戦ってないよ」

「じゃあ、もし、もしも諏訪子さんが父さんに何も言っただけで無かったら……」

「私はここに居なかったかもわからないねえ」

美鈴の疑問に答えたのは、巫女さんと一緒に戻ってきた神奈子だった。巫女さんは各々の仕事に取り掛かり、神奈子は卓に座った。

「諏訪子との戦いの対策はしてただよ。最初の頃はミシヤグジ以外には厄介なのがいないと思ってたのさ。だけど蓋を開けてみればミシヤグジたちが乱入するのを防ぐために従えてきた何十の神を圧倒的な強さで叩きのめしてたんだよ。その後こっちの軍勢の様子を見に行ったときは驚愕したよ。連れてきた奴らの全員が戦闘不能になっていて、おまけに半分以上は重傷だった。ミシヤグジにやられたのかと思っただかと思っただかと思っただか、重傷を負わせたにしたら張本人は面倒になったから途中で選手交代って言って、私らの戦いをずっと見てたって言われた時にはぞっとしたよ」

神奈子は自らの湯のみに自分で茶を注ぎ、一口飲んだ。

「今ではこうやって笑って話せるけど、当時は本気で笑えなかったねえ。ちなみにさ、諏訪子が何も言っただかどうだったのさ？」

「んー。信仰力が信仰の供給力を壊してから潰しにかかったかな。それが駄目だったら生命力を壊してからとかかなあ」

さらっと言っただか俺の言葉に衝撃を受けたのか、神奈子は持とうとしていた湯飲みを落とした。幸いにも湯飲みは倒れずに立った。

神奈子は持とうとしても上手く持てないくらいに動揺していた。ようやく持てるくらいに落ち着き、「まさか本当に殺されかねない事態だったとはねえ」としみじみ言った。

それから洩矢が守矢になったときのことから、俺が旅立つまでの話を神奈子に交えて美鈴に聞かせた。

全てを話し終えたとき唐突に神奈子が、「そうだ。私の知らない諏

訪子の失態話とかないのかい？」と聞いてきた。

「いろいろあるけど、巫女さんに聞かせるのは諏訪子の威厳に関わるから避けたいんだけど」

俺はそう断りを入れると、「気にしないでいいよ。私が許す」と神奈子から許可が出た。俺は少し考えた後、まあいいかと思いい諏訪子の恥話を思い出す。

「昔さ、諏訪子が日課のようにやっていた悪戯があつたんだよ。その煽りを受けて俺まで被害を受けてたから諏訪子とお話した翌日に諏訪子が」

続きを話そうとした瞬間、遠くから「あああああ。待った待った待った待ったあ」と徐々に大きく、近付いてくる声。

巫女さん達がその声を聞いた瞬間、障子の戸を直していた巫女さんはスパンと戸を左右に全開に開け、破片を集めていた巫女さんは破片を綺麗に片づけて角に移動した。

直後、部屋にすぎざつと入ってきた諏訪子は「それは言っちゃ駄目なのおお」と言いながら、涙ぐみながら俺の肩につかみかかってきた。

「じゃあ、花壇の」

「あーあー！」

「雨の日の屋根」

「駄目駄目だめえ」

「二日酔いで」

「あーうー！」

「巫女さんに」

「あー！うー！」

恥以外のなんでもない話を話されそうになった諏訪子の目から徐々に涙がぼろぼろこぼれ落ちる。さすがにこれ以上は可哀想なので「止めとくよ」と神奈子に言った。

神奈子は呆れたような顔をし、諏訪子はほっとした顔をして俺の肩から手を離して空いてる場所に座った。

「諏訪子、あんただんだけやらかしてんだい」

「だってだってえ」

「そういえば諏訪子の失態と同じくらいの数の神奈子の失態も神伝手で聞いているよ」

「え？」

今度は神奈子が固まる番だった。

「昔、飲み過ぎ食べ過ぎを注意した神を」

「言っなあ！」

卓をバンと叩きながら神奈子は立ち上がった。

「社の前に立てた御柱が」

「ああああ！」

今度は神奈子が諏訪子のようになってきた。

「神達の会合の時に座った瞬間に」

「許して……」

「並べた御柱が」

「私の生命は……」

「神の粥事件」

「もう尽きてる……」

諏訪子とは違い、徐々に力尽きていく神奈子。これ以上はまずいと思っただけで話を切り上げた。

「というか、どうして父さんが神奈子さんと諏訪子さんの弱みを握れたのが凄い不思議なんだけど」

そう、美鈴が最後に呟いた。

22話目 乱れ乱れて

守矢神社に来て、気が付いたらもう2年経った。

この2年で美鈴が驚くほどの成長速度で強くなった。真つ向勝負で神奈子と諏訪子との模擬戦で両者を苦戦させるほどになっていた。

……美鈴が強くなるのは俺を押し倒すためのものではないと思いたい。

美鈴が強くなるのは構わないのだけど、そろそろ旅を始めたいと思う。

そのことを神奈子と諏訪子に旅立つことを告げる。神奈子は「そうかい。さびしくなるねえ」とだけで予想の範囲内だと言えた。

問題は諏訪子だったが、意外にも「寂しいけど、また会えるから大丈夫だもん」涙をためながら別れることを諏訪子が了承した。

「それで、いつ出るんだい？」

「食糧の準備を見込んで、急だけでも明後日の朝の予定」

「用意するのは食糧だけかい？それなら食糧はこっちで準備するから、巫女たちに別れの挨拶でもしてきなよ」

俺は神奈子の言葉に「じゃあ、行為に甘えさせてもらつよ」と言い、神奈子と諏訪子のいる部屋を後にした。

その後は敷地内にいる美鈴に声をかけに行く。

美鈴は神社の裏で一人瞑想していた。瞑想している美鈴に「美鈴。ちよつと瞑想止めて話を聞いてくれない？」と声をかけるが、美鈴は反応しない。

それだけ集中している証だというのは解る。普段なら黙っているけど、今回は急ぎの用件。

俺は足下にあった小石を垂直に蹴り上げ、手のひらで手のひらで小石を打つ。狙ったのは美鈴の眉間。

小石は美鈴の眉間に当たる直前に美鈴は目がかつと開き、眉間に当たる前に美鈴は小石をつかみ取った。

美鈴は少しばかり小石を見つめた後、俺に聞こえるほどの声で「小石にわざと当たって責任取ってもらえば良かった」と言った。

「……それはいいとして、明後日旅に出るから別れの挨拶しに行くよ」

美鈴は「解った」と行って立ち上がり、俺の後に着いてきた。

ちなみに、美鈴は巫女さんの大半に人気があり、一部の巫女さんからは慕われていた。

「お姉様あ。行っちゃ嫌ですー」

「そうです。美鈴お姉様は残るべきです！」

両腕をがっしりと2人の巫女さんに掴まれながら、こんな感じに慕われている。美鈴も困っていたが、偉い巫女さんからの雷が落ち、美鈴は事無きを得たのだった。

こんなこともあったが別れを済ませ、その日のうちに荷造りを終えた。持つて行く物の修繕や部屋の掃除をし終えた時には日はもう沈み、夜になっていた。

「あっ」

「美鈴。もう少し奥まで入れるよ」

「だ、だめ……まだ、心の準備が」

「だめじゃないよ。ほら、動かないで」

美鈴の肩を押さえながら、棒をゆっくり美鈴の中に入れる。が、美鈴が少し動いたせいで入れる位置がずれた。棒は少し上の部分に当たる。

今度はじらすことなく再び棒を入れる。棒はゆっくりと美鈴の中に入り、何度か上下に動かす。

上下に動かす度に、美鈴の口から快樂が入り交じったような声が出る。

一定の回数上下させてから棒を抜く。抜いた後の美鈴の顔は若干紅く、淫靡に見える。

「……もっと、して」

美鈴は自らの上半身を起こし、まるで快樂を欲しているケダモノの

ような雰囲気をまとい、俺を見た。

俺はくすつと笑い、美鈴の期待に応えるように耳元で、「まだ、終わってないから横になって」と言いながら再び美鈴を横に寝かせた。瞬間、「2人で何やってんのさー！」と絶叫しながら諏訪子が乱暴に戸を開けて入ってきた。

「見て、解りませんか？親子のふれあいです」

はつきりと美鈴が言うのと、諏訪子が1歩下がって悔しそうで妬ましげな目つきで美鈴を見る。

美鈴は勝ち誇った表情で諏訪子を見ながら、

「どうぞやら、諏訪子さんは父さんに優しく、こうしてもらったことがないみたいですね」

と言い放つ。徐々に諏訪子の目には涙が溜まり、やがて「うわああん」と子供のように泣き、走り去ってしまった。

直後、神奈子が諏訪子が走り去った逆の方向からのんびりやって来た。

「諏訪子の奴に何があったんだい？」

「この現状を見て、美鈴に散々言われて走り去っていった」

「そういうことかい。あと私にもやってくれないか」

「美鈴が終わってからなら。とはいえずぐ終わるけど」

美鈴の耳にふつ、と息を吹きかけると、美鈴の身体が一回びくつと震えた。

「はい終わり。じゃあ神奈子」

今度は神奈子が横になる。

「しかし、誰かに耳掻きなんてしてもらうなんて初めてだねえ」

耳掻き棒を新しいのに変え、神奈子の耳をかりかりと掻く。

「くつ、こ、これは、癖になる」

「そうですね。父さんの耳掻きは力も絶妙で丁寧ですから。だからとっても気持ちいいんです30年近くやってもらってますから解ります。この魅力には誰にも勝てません。だから、いいですよ」

美鈴は悪魔が甘美な果実をちらつかせ、他者をたぶらかすように神

奈子に囁く。

美鈴の囁きを余所に、耳搔きは着々と進む。神奈子の顔も徐々に赤みを帯びてきていた。

「わ、私は……負けない。負けるもの……」

神奈子は何かを言い掛けたが、丁度の耳搔きを終えたのでふつ、と神奈子の耳に息を吹きかける。美鈴とは逆に神奈子の身体から力が抜けた。

「こつちは終わった」と告げると、神奈子は身体を起こしてその場に座り、と息を整えた。息が整った頃合いを見て、「もう片耳は？」と聞く。

「頼む」

神奈子は即答し、再び横になった。

もう片耳も同じようなことになりながらも耳搔きは終わった。

「ありがとう。おかげで耳はすつきりした。けど、何回もやってもらうわけにはいかないねえ」

と、耳搔きを終え、息を整えた後に神奈子はそう言った。

「っと。忘れてた。私がここに来たのは酒でも飲もうと誘いに来たんだった。ちよつと持つてくるから待つててくれないかね」

そう言つて神奈子は部屋を後にし、すぐに酒と杯を持つてきた。

酒は神奈子自らが杯に三つ注ぐ。

「神様に酌させる人間と妖怪なんて、俺らが初めてだよな」

「そう言われればそうだねえ」

笑いながら酒を注ぎ、酒が注がれた杯を俺と美鈴の前に置いた。

「諏訪子はいないけど、いない奴が悪いということ。じゃあ、再び旅立つ友の無事を祈つて」

神奈子が杯を上げた少し後、俺と美鈴も杯を上げる。

その後、同時に杯の酒を一気に飲み干した。

しばらく雑談しながら酒を飲んでいたが、すっかり出来上がる神奈子と美鈴。

美鈴が「酔つたから介抱して」と言つて抱きついてきたのを無視し、

神奈子も同じ事をしてきたので無視したり。

美鈴が「接吻」と言って唇を奪いに来たのを回避したら、神奈子に同じ事をされて避けられなかったり。

……いろいろあって気絶させてから寝室に放り込んだけど。

さすがに神に匹敵する妖怪と神を相手に怪我をさせないように死守するのは大変だった。

「何やってるの？」

一段落付き、1人月見酒を楽しんでいたところに諏訪子が戻ってきた。

「このお酒、私たちへの献上品なんだけど？」

「持ってきたのは神奈子だから問題ないかと。持ってきた本人は酔って寝ちゃったけど」

「それならいいや。あ……神奈子ので杯でいいか。私も飲むから注いでよ」

諏訪子が神奈子の使っていた杯を俺に差し出した。俺は黙って酒を注ぎ、諏訪子に渡した。諏訪子は杯の酒を一気に飲み干し、ふう、と一息。

「……お酒、久々に美味しく感じたなあ。みんなで飲むのもいいけど、自分が愛した人とのんびり飲むと別格かなあ」

空の杯を両手に持ち、諏訪子は言う。

「100年前から最近までさ、ここで1人飲んでも、神奈子と飲んでも美味しいとは思えなくてさ」

諏訪子が俺の肩に自分の頭をぽふっと乗せた。

「あの日、送り出したのはダメだったかなって思うこともあった。でも、送り出してよかった」

「それは何で？」

「成長して帰ってきたから」

諏訪子は俺をまっすぐ見ながら、笑顔ではつきりと言った。

「そっ真っ直ぐ言われると照れるね。照れて諏訪子の方を見れない」

「全く照れてないでしょ！こつちを見るっ。このっ、このっ」
そつぱを向いた俺を自分の方に向かせようと頑張る諏訪子だが、上手いかない。上手いかないせいで徐々に行動は過激になっていく。
そして、過激な行動をあえて受け止めず押し倒されるような格好になった。
やがて目が合い、『どうだ』と言わんばかりの目で見てきたが、自分がどういふ格好になってるか気が付き、諏訪子の顔が真っ赤になった。
「……ずいぶん過激な主張だね」
「ち、違っ」
「違うじゃないじゃん。初めてるときだって赤ちゃん作ろうって迫ってきたじゃない」
「あー……っー」
事実が事実なだけに、諏訪子は言い返すことができなくなっているようだ。
「でも、そこまでしたいならいいよ」
「えっ？」
「嫌なら俺だって嫌だって言うよ。前るときだって抵抗こそしたけど、結局受け入れてるでしょ？」
「そ、そんなこと言うと、私だって引き下がれなくなるよ」
「嫌なら辞めるよ？」
俺が誘うように言うと諏訪子は「嫌なわけないじゃない」と断言し、そのままゆっくりと顔を近付けて俺の口を濃厚な方法で奪った。
濃厚な夜は朝早くまで続いたせいか、諏訪子が「あーっー」言いながら朝食を食べるといふ珍事件が発生した。
ちなみに美鈴はどうして諏訪子がこうなったかを察したため、夜に俺が襲撃を受けて防衛戦を繰り広げることになり、なんとか勝ったのは余談である。

23話目 朝風呂とお別れと

朝食をとるために俺、神奈子と並び、対面に諏訪子と美鈴が座る。いつもなら俺、美鈴と並んで対面に神奈子、諏訪子となるのだが、今日はちがった。

もう一つ違うところを言うならば、雰囲気ギスギスしていることである。

発信源は諏訪子。ギロツと睨むように俺と神奈子を見る。俺は無視しているが、神奈子はばつが悪いようで、諏訪子の目を見なかつた。理由は単純で、俺と神奈子の身体から湯気が出ていたこと。2人だけで温泉に入ったことが相当気に入らない様子。

ちなみに美鈴は俺を独占できるので、どうでもいいらしい。

「なんで2人だけで温泉入ってるのさ」

「諏訪子と美鈴が寝てた。俺は十分寝た。2人は邪魔せず寝かせておこう。どうしよう。そうだと朝風呂だ。入ってたら神奈子来た。折角だから一緒に入ろう。という流れだけど？」

自分が寝ていたので、あまり強く言えず睨んだり文句を言うことしかできないようだ。

「でもさっ！何で神奈子の匂いがぶんぶんするのさ！」

「ぶっ」

吸い物を飲んでいた神奈子は自らのお椀に吸い物を吹き出した。

その瞬間、諏訪子の目は神奈子に向いた。

「神奈子？何か、やましいこと、したのかなあ？」

「バカ言え。お前が変なこと言うだろう」

ぎゃーぎゃー言い合う2人に対し、俺と美鈴は黙って自らの食事を神奈子と諏訪子から遠ざけ、結果諏訪子と神奈子の方を見えるよう隣り合わせに座る。

「父さん」

「何？」

「神奈子さんと何かあったの？」

「背中流しあって話をしたのと、ちょっと神奈子がドジって俺が押しつぶされただけ」

「そっか」と、美鈴はどこかつまらなそうにそう呟いた。

「父さん。出るまで時間あるんでしょ？ だったらお風呂行こ」

「いいけど？」

俺が了承すると、諏訪子と神奈子の言い合いが止まった。正確には諏訪子がびたりと止まったからだが。

「お風呂、また、入る？」

「しばらく入れないからね」

「私も、入って、いい？」

「……美鈴に聞いて」

「いいですよ」

と美鈴の返答を聞いた瞬間に、一気に朝食をかきこむ諏訪子。

「あ、神奈子さんもどうですか」

「じゃあ私も再び入るとするかね」

諏訪子とは対照に、神奈子の食事の速度は変わらなかった。

「ごちそうさまっ」

「諏訪子」

「何っ？」

「浮かれててもさ、俺らの食事終わるまでは入らないよ」

「……うー」

諏訪子が恨みがましい目で見てるが、事実だから仕方がない。

ちなみに食事が終わるまで諏訪子は部屋の隅の方で正座してずっとこっちを見ていたのが妙に不気味だった。

それから全員で風呂に入る。脱衣所に男がいるのはどうかと思ったので、先に俺が風呂に入って待っているということをやったけど、

「構わない（よ）」と全員一致の返答だった。

いいのだろうかと思っただけど、気にしないことにする。

早々、諏訪子がへこんでいた。

具体的にはゆさりゆざりと動く4つの胸部の西瓜と、くびれを見て「ねえ。つるぺたでもいいよね。おっぱいだけじゃ決してないよね？」

諏訪子が涙目で訴えるが現実是非情である。

「……残念だけど、人を好きなのは胸で判断しないけど、俺は大きい方が好き」

死刑宣告に諏訪子は落ち込んだ。それはそれはこれとないほどに。

「信仰を！誰か私に巨乳を滅ぼすための信仰を」

「やめんか馬鹿者」

げすつと諏訪子を蹴飛ばす神奈子。ザボンと湯船に落とされる諏訪子。蹴飛ばした瞬間も皮肉にも神奈子の胸はゆざりと揺れた。

それがとどめになったのか諏訪子は立ち上がり、わざわざ湯船の角に移動してから膝を抱えて座り込んだ。

「父さん父さん。身体洗って」

「ん」

そう言うてへちマを用意するが、へちマをぺしつとたたき落とされた。

「いつもみたいに素手で洗うの」

「いい歳した娘が男に素手で身体を洗わせるか？」

「父さんに責任とって貰えばいいだけだもん」

はあ、と溜め息をついて手で洗おうとしたが、右手を神奈子、左手を諏訪子に捕まれた。

両名とも笑顔。但し、口元だけ笑っているけど、目は全く笑っていない。

「ダメダヨ。ワタシモシテモラッタコトナイカラ」

「サセナイヨ。ソクナイヤラシイコト」

「ナニイッテルンデスカ。コレハイマハワタシノトツケンデスヨ」

「ケーロケロケロ」

「フフフフ」

「アハハハハ」

怖い笑いの後、三つ巴の乱闘が始まった。

俺は黙って自分の身体を洗ってから風呂に浸かり、暖まる。

俺がある程度暖まった後も乱闘が続いていたので、まずは美鈴の後ろに回り、美鈴の肩にドロップキックをぶちかまして湯船に叩き込み、地面俺がに落ちると同時に後転する。

二回転ほどしてから立ち上がると神奈子の腕を持つ形になり、投げっぱなしの背負い投げで湯に放り込む。

その勢いで前転しながら諏訪子に接近。身体をうまくひねり諏訪子に足払いをかけ、後頭部を打ち付けるよう体勢になるようにする。

諏訪子が頭を打ち付ける前に俺が立ち上がり、両足を掴んでぐるぐるすると3回転し湯に投げ入れた。

三度湯柱が上がった。突っ込んだのは同時ではなかったのに、ざばつと顔を出したのは同時だった。

「頭、冷えた？」

「……はい」

結局、身体を洗うのはヘチマを使うことで決着した。

神社の前には諏訪子と神奈子の両名と俺と美鈴になっていた。

「諏訪子、行っちゃだとかごねないの？」

「……やだつて行って行かないんだったらいくらでもごねるよ。でも、ごねたとしても行くんでしょ？つていうか、解つて言ってるでしょ？」

「もちろん解つて言ってる」

「あーうー！」と言って俺を全力で殴ろうとする諏訪子だったが、こつちにむかってきた諏訪子の頭をぐつと押さえつけられておいて殴れないようにする。最初は殴るような攻撃をしていたが、次第に腕をぐるぐる回しながら「あーうー」と言っている。まるでだだっ

子だった。

「何というかだ、またいつか会えるだろうから湿っぽくない別れてないかねえ」

「諏訪子その行動に湿っぽさなんて無いから安心して」

「そりゃそうだ」

諏訪子はまだ「あーうー」言いながら腕をぐるぐる振り回し続ける神の姿。信仰している人には絶対見せられない光景だ。

「何やってるんだい。ほら、最後の挨拶くらいしっかりしなよ」

「……うー」

うなりながらも離れる。離れた後も少し興奮していたが、神奈子に「深呼吸して落ち着きな」と言われて、すーはーと自らを落ち着かせるように深呼吸をする。

だいぶ落ち着いたのか、興奮はなりをひそめた。

「また、会えるよね。絶対、絶対に」

「そうだね。またいつかここに来るよ」

「約束だよ」

そう言っつて、諏訪子は俺に抱きついた。俺は頭を撫でた。

「私からは何というか。また元気な顔を見せてくれればいいよ」

俺に撫でられていた諏訪子が「神奈子お婆ちゃんみたいなのを言うんだねえ」と言う。諏訪子からは見えないが、俺と美鈴の目には神奈子の表情から笑顔から消え、目が細くなるのが見えた。

俺は無言で撫でている手を諏訪子の頭から手を放した。それが合図になったのか、神奈子は諏訪子の頭上に拳を振り上げ、そのまま下ろした。

直撃した諏訪子はうずくまり、美鈴は苦笑い。

「美鈴もだ。また元気な顔を見せてくれればいい」

「はい。神奈子さんもお元気で。あと諏訪子さんも」

「なあんかおまけ扱いで嫌な感じだけど、まあいいや。美鈴も元気でね」

「はい。父さんのことはもう忘れてもらっていいですよ」

「それはできないよ」

美鈴と諏訪子の間には火花が散る。俺と神奈子は顔を見合わせて苦笑い。

「神奈子さんは……まあ、いいです。次に来たときにしっかりと話をしましょう」

美鈴がくすつと笑ってそう言うと、神奈子は表情を特に変えず「何のことかな？」ととぼけるように言った。それに対して美鈴は「今はそれでいいです」とだけ返した。

「っと。食料はそれだけでいいのかい？どうせならもう少し多めに持たせるけど？」

神奈子の問いに対して、俺は「それほど遠くないからこれくらいで大丈夫」と言う。少し神奈子は考える様子を見せて、納得したのか「解った」と言った。

「さて、そろそろ行くよ」

「……そうか。気をつけて行くんだよ」

「気をつけてね。また、また会おうね」

「解ってる。諏訪子も神奈子も元気で」

それじゃあ、と荷物を持ち、神社を背にして歩き始めた。後ろを見ると、諏訪子も神奈子もまだいる。恐らく、俺たちが見えなくなるまで見ているのだろう。

ふと横を見ると、美鈴の目から涙が出ていた。

「何泣いてるのさ。永遠の別れってわけじゃあるまいし」

「解ってる。解ってるけど……やっぱり、寂しくて」

ポロポロと出る涙を美鈴は自分の袖で拭った。美鈴の頭を帽子越しに撫でる。

「別れるたびに泣いてると、今後別れがあったときに毎回泣くことになるぞ？」

「そうしたら、父さんに、なぐさめて、もらおうよ」

そんな会話をしながら、俺と美鈴は次の目的地である鬼の里を目指した。

24話目 侵略者（前編）

鬼の里付近までの旅路はそれほどでもなかった。

全部返り討ちにしたが人妖含めて襲撃は予定の範囲内。だけど、予定の範囲を超えた事象が起こっていた。

「美鈴」

「いくらなんでもこれは解るよ」

鬼の里までまだかなり距離はあるが、複数から発せられている妖気が集まって濃密なものになっている。妖気は恐らく鬼だけではなく、種族は解らないが強い妖怪がかなりの数いるのだろう。

濃密な妖力があることから、力の弱い妖怪や普通の人間はまず間違いないで発狂するだろうが、耐性がある俺と神（神奈子や諏訪子）と1対1で勝負して平然としている美鈴が入ったところかどうかということはない。ないのだが、

「あ、ああ。妖気が、妖気が、私の妖怪の部分を呼ぶ。父さんを襲いたい」

これである。

美鈴は俺の背中にべったりと抱きついている。むにゅむにゅとわざと押しつけているであろう2つの美鈴自慢のやわらかな塊もすでに気にならない。……美鈴以外にやられると気にするとは思いが。

何も言う気になれなかったので、妖力を気にかげながら美鈴をそのまま背負って歩いていると、美鈴はすっと背中から降りた。

「父さん」

「いくらなんでもこれは解るよ」

さきほどのやりとりの逆にはなったが、この光景を見れば普通の人間だろうが力の弱い妖怪だろうが誰がどう見ても異常だと解るだろう。

背中に黒い羽根がついている人のような何かが、空に向かって『へ』の字や『く』の字になって舞った後、重力に従って地面に落下して

いた。

「誰かの攻撃を受けて吹っ飛ばされているようだね」

「そうだね。あ、集団がこっちに来てるけど、援軍かな？」

美鈴が指をさして言う。確かに黒い羽根をつけた集団が来ていた。

「美鈴。どっちを援護する？」

「……集団で襲ってるのっていうのが嫌だから襲われている方、かな？」

「同じか。よし、じゃあ援護に入るよ」

背を向けている黒い羽根の奴らを吹き飛ばしながら中心に向かう。

それは奇襲として成功し、一部の奴らを吹き飛ばしながら応戦していた誰かの元にたどり着いた。

誰かは、額に一本角を生やした俺が知らない金髪の鬼だった。

「おや、人間が何か用かい？」と、金髪の鬼が聞いてきた。

「鬼の里に向かおうと思ったらさ、集団で襲ってる気に入らない奴がいるからぶっ飛ばそうかと思って」

「妖怪に向かって気に入らないって言うなんて大胆に人間だねえ。」

それにしても鬼の里が目的地かい？」

「そう。ちなみに質問だけどあとこいつらは何？」

「鬼に喧嘩を売ってきた下っ端天狗だよ」

そっかー。と頷いて飛んでいる天狗を見回してみる。

「かなりの数いるけどまとめてぶっ飛ばせばいいか」

俺がそう言うと、天狗が一斉に笑いだした。

「人間と木っ端妖怪ごときがその鬼共に味方しただけで俺たち天狗に勝てると思ってるのか？」

いかにも『お前らを見下して当然』というような態度のこの天狗が指揮官的存在なのだろう。そもそも、餌と木っ端扱いしている俺たちにお仲間を吹っ飛ばされているだろうに。

そう言おうと思ったのだが、美鈴がにっこり笑って「父さんが餌？そういうアンタ達は価値すらないゴミでしょう？……あ、すみません、ゴミに失礼でしたね」と言ってくれた。

「何を思いあがっている木っ端。お前らのあんな攻撃があつたところで痛くもかゆくもない。数ではこちらが有利だしな。おい、やっちまえ」

部下らしき天狗に向かって、偉そうにニヤニヤと笑いながら命令した。

部下の天狗もニヤニヤとした笑みを浮かべながら、一気に加速して美鈴に突っ込んできた。

突っ込んできた天狗が美鈴の命を奪う。天狗からしてみればその予定だった。

だが現実には天狗にとってみれば悪夢のような出来事で、美鈴と俺にしてみれば容易く当然のこと。突っ込んできた天狗の顔面には、美鈴の拳が深々と埋まっていた。

「木っ端妖怪に向かって真正面から飛んできて、鼻と前歯をへし折られる。何だ、貴方達……全然大したことないじゃない」

顔色一つ変えず、嘲笑いながら美鈴は天狗をバカにするように言った。突っ込んできた天狗がずるりと美鈴の拳から離れ、地面に崩れ落ちた。

「あ、ゴミは持ち主が処分してくれないかな？ゴミは持ち主が処分する。これが鉄則だよな」

美鈴は自分の足元に転がっていた天狗を偉そうにしていた天狗の足元に届くように蹴っ飛ばした。火の中に油をまくのではなく、若干揮発したガソリントankを火の中にぶち込むような行動だった。

「てめえ……生きて、帰さねえ」

そして、揮発したガソリンが爆発するがごとく天狗は激高した。ここまで文字通りだと何だかなあと思う。

横にいた鬼をちらりと見る。目が合い、鬼がにやりと笑った。

「私やその人間のことも忘れたとは言わせないよ」と、手の関節をばきばき鳴らしながら鬼は言う。

「俺、妖怪からしてみれば弱者のはずの人間なんだけどなあ」と、頬を人差し指でポリポリとかきながら俺は答える。

「私からしてみれば弱者のはずの人間がこの中で一番やばいって勘が言ってるんだろうけどねえ。旦那ならたかが天狗ごときが何十何百何千いようと勝てる相手だろう?」

「俺は例外だよ。とはいえ、何千は言いすぎだよ。さすがに人海戦術でこられたら勝てないかもしれないよ?」

「かもしれないねえ。で、そっちのお嬢ちゃんはどう思ってるんだい?」

と言つて、にやにや笑いながら金髪の鬼は美鈴を軽く肘でつついた。美鈴は鬼の方を向いて胸を張って断言した。「父さんなら、何億何兆何京来ても負けません!」と。

自信满满的な美鈴の答えに俺は「さすがにそれは負けるかもしれない」と言い返す。……出来るかもしれないけど。

天狗を無視してそんなやりとりをしているのだから天狗が黙っているはずもない。

怒り心頭の天狗が顔を真っ赤にしながら「おい、貴様ら……俺らのことを無視するとはどういうつもりだ?」と言ってきた。

会話をしていた俺たちは同時に天狗の方を見た。

俺は「あ、ごめん。すっかり忘れてた」と言い、

金髪の鬼は「すっかり眼中になかったよ」と言い、

美鈴は「どうでもいい存在だったの」と言った。

三者三様の『お前のことなどどうでもいい』という趣旨の返答に、真っ赤になっていた天狗の顔がさらに真っ赤になった。

「てめえら散々コケにしやがって。てめえらまとめて皆殺しだあ!」天狗が叫ぶと、他の天狗も一斉に突っ込んできた。

3対多数。普通に考えれば数の暴力にて天狗の方が優位なはずなのだが、苦もなくあっさりと片づいた。

空から攻撃してくる天狗は俺がまとめて全部地上に落とすし、その落ちた天狗を美鈴がさくさくと片付けていく。金髪の鬼は最初こそ天狗が落ちたことに呆けていたが、やがて美鈴を抜かんとばかりに片付けていく。強敵、猛者と呼べるような敵はおらず、ほんとうにあ

っさりと片付いている。

それを目にした指揮官的立場の天狗の顔色が一気に悪くなる。

「ありえねえ……何だよ！何なんだよ！特に！人間！てめえはよお！」

顔をひきつらせた指揮官的立場の天狗は叫んだ。仲間たちがあつさりとやられ、加えて天狗が山積みになっていくところ目の前で見ただからか。はたまたその両方か。威勢の良かった天狗はヒステリーを起したように叫んだ。

「俺はただちよつと能力がいいだけの普通の人間だよ。さて、残り
は貴方だけ。覚悟できてるよね？」

威勢のよかった天狗は心が折れたようで、「ひい、来るな、来るな」と言いながら必死に後ずさっていく。

俺が一步前になると、天狗は一步分後ずさる。単調なまでの繰返しを何回かやると、天狗の背中に太い木があつた。

それは、それ以上後ろに下がれないことを意味していた。

天狗は下がれないのに下がろうとする。殴れるところまで来たところで、天狗は白目をむいてその場に崩れ落ちた。

俺は気絶した天狗を視界からはずし、美鈴たちの元へ戻った。

25話目 侵略者（中編）

美鈴たちの元に戻り、俺は金髪の鬼に「じゃあ、俺たちは先に鬼の里に向かうからこれで」と言っ先へ急ごうとしたが、金髪の鬼に待ったをかけられた。

曰く、「面白そうなことを見逃すつもりはないよ」とのこと。

面白そうと言われてみたら確かにそうだろう。『人間が妖怪と旅をしている』『人間が鬼の里へ向かう』なんて普通じゃありえないし俺は金髪の鬼にどうするのか？を尋ねてみると、金髪の鬼はにやりと笑い「ついていくよ。駄目とは言わないよね」と言った。

俺は「解ったけど、俺と美鈴に遅れないようについてきてね。遅れたら置いていくよ」と言う。

挑発的に聞こえる言葉に対して金髪の鬼は笑って答えた。「それでいいよ」と。

美鈴にアイコンタクトで同意を取ると、美鈴は頷く。

「それじゃあ、行こうか」

俺たちは鬼の里へ向けて走り出した。

「そういえば礼を言いそびれていたね。天狗の件、面倒事がはぶけて助かったよ」

走り出してしばらくしてから金髪の鬼は礼を言ってきた。

「そのことなら気にしなくていいよ。むしろ余計な手出しをしたかと気になっていたくらいだよ」

「あの程度の力量しかない天狗が群れになったところで面白くもなるともないよ。むしろあれでよかったよ。あれが終われば次に強い誰かと会える可能性が増えるしね」

と、俺をじつとみながら笑って言った。後で戦うんだろうなあ、と思っ。

「あ、そういえば気になっていたんですが、どうして天狗と戦いになってるんですか？」

俺の隣を走っていた美鈴が言う。

「ああ。天狗が最近この山に住みだしてね。で、この山を支配するとか言い出したから支配権をかけて大喧嘩の真っ最中ってわけさ」「支配ねえ。後で来た天狗がしゃしゃり出るのはどうかと思うんだけどね」

「おや？旦那はこのあたりのことに詳しいのかい？」

「それほどでもないと思うよ。100年前ならいざ知らず、ここ50年くらいは知らないしね」

俺がそう言つと、金髪の鬼は信じられないものを聞いたという表情になる。

「私より、年上？」

「種族『人間』でこの外見だと妖怪からしてみれば年下っぽく見えるよね。ちなみに今220くらいだよ」

「あ、そうなの……なんですか。ええと」

どうやら俺の方が年上だったらしく、急に丁寧な言葉を使おうとする金髪の鬼。俺は苦笑しながら「丁寧な言葉にしなくてもいいよ」と言つと、金髪の鬼はほつと息を吐いた。

「そう言ってもらえると助かるよ。それで、旦那は鬼の里へ何の用なんだい？」

「んー。俺の名前を言えば解るかな？つていうか名前を言つてなかったね」

「そういえば名乗ってなかったね。じゃあ私からだ。私は勇儀。星熊勇儀だ。よろしく」

勇儀が自分の名前を告げた後、美鈴、俺と続く。俺の名前を聞いた勇儀が首をかしげた。

どうかしたのかと聞いてみると、「いや、その名前はどこかで聞いたような気がしてさ。……名誉のために言っておくと悪い話ではないんだけど、何だったかなあ？」と微妙な返答だった。

「具体的に俺が誰なのかは後で説明するよ。俺も後ろめたいことは……無いと思うけど」

「じゃあ種明かしは宴会の時にでも話してもらおうかね。ああ、旦那と美鈴も参加してもらおうよ」
勇儀がそう言ったので、俺は美鈴に警告しておく。「美鈴、覚悟しておけ。確実に3日は酒宴だから」と。
美鈴が『え、冗談だよな？嘘だよな？』という顔をしていたが、俺はあえて何も言わなかった。

「また天狗が鬼……だと思っけど集団で囲んでるね。通行の邪魔だからさっさとやろうか」

「はい」

「ちよつと遊びに行ってくるっていうような感覚で言ってるねえ。もちろん私も行くけどさ」

勇儀のときと同じように天狗の後ろから攻撃を仕掛けて道を作った。その中心に背丈が低い鬼がこちらをじっと睨みつけてきたが、その表情が一気に笑顔になる。

「勇儀！助かったよ。さすがに天狗の数が多くて面倒になってきたところだよ」

勇儀が背の低い鬼のところまでまで歩いて行く。歩きながら勇儀は周囲をぐるりと見渡し、「おー。よく集まったもんだねえ」と呑気に言った。

「それでさ、勇儀が連れてきた誰？」

「ああ。この二人は……えーと」

勇儀が返答に困っていたので代わりに俺と美鈴が答える。

「人間と」

「自分でも種族がよく解らない妖怪」

「いや、人間と妖怪って言うのは解るんだけどさ」

背の低い鬼に突っ込みを入られた。

「じゃあ……最近人間より妖怪に縁があるということに気がついた

普通の人間と」

「ええと……人間に育てられて私を育てた義理の父親の子供を産む予定の妖怪」

美鈴の言葉を聞いた勇儀と背の低い鬼が引いた。

「いやまあ、私から見ても結構いい男だと思うケド、それでも父親を好きになるのはどうかと思うんだけど」

「む！勇儀は父さんを好きになったの？父さんを婿にするんだったら私よりも強くないと認めない！」

美鈴と勇儀が漫才っぽくなってきた。それを俺はじつと見ていたが、俺の服の袖が引つ張られていた。鬼が俺の服の袖をひっぱっていた。背丈の低い鬼は俺を見上げて言った。「どうして、あんなったの？」と。むしろそれは俺が聞きたい。

「20になったら独り立ちできるように常識とか教えて言ったんだけど何故かこうなった。他の人や神にも話しても原因が解らなくてさ」

「……うわぁ」

呑気にグダグダと話しをしている俺たちにしびれを切らしたのか、俺たちを囲んでいた天狗のうちの1体が「死ねえ」と言いながら俺に向かって突っ込んできた。

俺は少しだけ横にずれて、天狗が横に来たところで天狗の後頭部を鷲掴みにした。鷲掴みにした天狗を叩きつけようとしたが、その前に美鈴が宙ぶらりんになっている天狗に肘の一撃を入れた。俺は予想外の一撃だったせいで、天狗から手を離してしまった。離れた直後に、美鈴が俺と同じように片腕で頭を鷲掴みにして、宙ぶらりんにした。

「ねえ、私の父さんに何をしようとしたの？ねえ」

美鈴が今まで見せたことのない恐怖を誘う笑いを浮かべた。妖怪らしい笑いと言えば笑いだけど、むしろ病んだストーカーが泥棒猫を見つけて処分する直前のような笑い方だった。

「不意打ちしようとしたよね？怪我を負わせようとしたよね？でも

父さんは軽く避けるのは解ってる。でも、死ねって何かな？私から父さんを奪おうとしたよね？」

矢継ぎ早に笑いながら話す美鈴。そして、言い終わると一気に表情が無表情になって、言った。

「そんな奴、いなくなればいい」と。

天狗の後頭部を地面に思いっきり叩きつけ、馬乗りになって顔面を右左右左とラッシュを繰り返す。病んだ目でラッシュをするものだから、拳からは天狗の血が飛び散っているから天狗の土気はおもつきり下がる。

助けようとする天狗が近付いて助けようとしたが、美鈴が病んだ目で見ただけで腰が引けてしまっている。

「……止めるか」

正直、見ているこつちが怖いし。

「美鈴。本来の目的を忘れるなよ」

俺がそう言っていると、天狗を蹴り上げて、重力に従って落ちてきた天狗の頭を掴んだ。

「よかったですね。本来なら10割殺しだけど、8割で終わりましたよ」

そう言つて、ブンと持っていた天狗を全力で投げ飛ばした。投げ飛ばされた天狗はその他の仲間の天狗が身を呈して回収した。回収する様も美鈴は病んだ目で見続ける。

回収した後は相手にしたくないと判断したのか、この場にいた天狗全員が飛び去ってしまった。

「……終わりよければすべてよし、かな？」

「だ、旦那。冷や汗が止まらないんだけど、どうすればいいだろうかね？」

「あ、あたしも止まらない」

さすがにアレを見た後はそうだろうと思う。俺も答えに窮したが、とりあえずこう答えた。

「忘れるしかないんじゃない?」と。

26話目 侵略者（後編）

結論から言うと、勇儀の時と同じように萃香も一緒に行くことになった。俺と美鈴が勇儀とともに鬼の里へ向かって言う事をいうと、「鬼の里に行くの？ふーん。こっちのほうが面白そうだから私も行く」と言ったのだった。

そうになると、女性三人男一人である。割合に対しては特に気にはしていないが、女三人寄れば姦しいという言葉は誰が言ったものだろうか。

だいたいあたつてはいるものの、そこまでのものではない。

「美鈴つて私たちと同じくらいの歳なんだね」

「そうだよ。父さんが実の母親から私を受け取ったのがそのくらいらしいので」

「実の母親？」

「父さんの目の前で亡くなったって」

「ご、ごめん」

「大丈夫。私実の母さんのことや父親のこと知らないから。私にとつて父さんは父さんだけ」

「じゃあ、そこから旦那の手一つで育てられたのかい？」

「そうだよ。一緒に寝たり料理をしたり、修業を積んだりしてもらったり。父さん以外に女性は知ってるけど、育ててもらったっていうのはないなあ」

「へえ。旦那つて妖怪を怖がらないのはこういうことがあったからなのかねえ」

「それは違つと思うよ。少なくとも鬼に知り合いがいるみたいだし、神様に知り合いがいるし」

「人間で妖怪や神様と交流があるっていうのはそれはそれで凄いよ。でも、美鈴が育つていくにつれて男にしてみればこんな大きな胸は強敵だよね」

「萃香……その眼つきと手つきがオヤジ臭い。でも父さんは別に何とも思っていないみたい」

「あれ、そうなるとお兄さんって……ふ」

「それはないよ。朝とかもう……」

「美鈴。それ以上はやめてくれないかい。ちょっと生々しいから」

「解ったよ」

「となると、まさか旦那ってつるんぺたんの子供体系みたいなのが好きなのかい？萃香みたいなの」

「名指しでつるぺた乳臭いってゆーな！こんなんでも、好きな人は……きつといる。はず、たぶん」

「何を言ってるんだい。男ってものはおっぱいがこのくらいでかいほうが好きなんだよ」

「父さんもおっぱいは大きいほうが好きみたいだけど、女性の価値はおっぱいじゃないって言ってるから」

「だよねだよねえ」

「でもやっぱり大きいほうが好きみたいだよねえ」

「そうみたい」

「うう。でも、でも、ちいさなおっぱい……ちっぱいでもきつと私を好きになつてくれる人が」

「ぺったんぺったん」

「つるぺったん」

「勝ち組おっぱいなんて大嫌いだー！私によこせー！ー！訂正。かなりやかましい。」

おまけに互いの育った環境とかの話だったのに何でいきなり胸の話になったのか。その辺を突っ込むと俺まで巻き込まれそうだったのであえて何もつかないほうが賢明だと判断した……のだが、運命と言つのは残酷なものでささやかな判断も許されることはなかった。くいくい、と誰に袖を引つ張られた。引つ張られた方を見ると、萃香が涙目になりながら上目づかいで俺を見ていた。

「ねえ。ちっぱいでも好きだよね……ね」

さすがに俺も困った。正直に言うのもななというかまずいし。かといって優しい嘘をつくにしても鬼が嘘そのものを嫌っているということも知っている。それを承知の上で萃香に質問をした。

「優しい嘘と残酷な現実。どっちが聞きたい？」

俺が言った言葉を萃香はどういう趣旨かを理解したらしい。「このおっぱい大好き魔人—————」と言って走り去ってしまった。

「追う？」

俺は萃香が走って行った方を指さして勇儀と美鈴に尋ねる。二人はどうでもよさそうな顔をして、「別にどうでもいいかな?」「私もそれでいいかな」という返答を返されたので、薄情にも萃香を放置して鬼の里へ向かう事にした。

女一人減ると姦しくもなくなるようだ。さっきまでのノリの話し方ではなくなつたが、「で、旦那は大きいおっぱいが好きなのかい?それとも萃香みたいな小さいほうが好きなのかい?」と、胸の話になるのだった。

萃香もいないので「大きい方」と素直に答えておく。萃香には悪いが、美鈴も勇儀も萃香以上にあるし、歩くたびに揺れるくらいであるから別にいいかという気で答えた。

「旦那も即答するかい?」

「でも女性を好きになる基準はそこじゃないんだけどね」

「でもおっぱいは大きいほうが好きと。ちなみに」

勇儀はそう言うのと、俺の手を取っておもむろに自分の胸に押しつけた。

「旦那の相手は私のこれとどっちが大きいか解るかい?」

「あっち」

即答すると勇儀は一瞬ぽかんとしたが「即答できるほどののかいと尋ねてきたので、首を縦に振った。

「私も自分より大きいのを持っているのを一人……いや、今日でもう一人増えたけど」

勇儀は美鈴の方をちらりと見たが、「まさかねえ」と言った。

胸談義がずっと続き、美鈴が勇儀の胸をもみしだいたりお返しに勇儀が美鈴の胸をもんだりしているのを止めたりしているうちに、鬼の里も近くなってきた。

里の方から大量の妖気が感じられた。鬼のものも感じるが、鬼じゃないもの……恐らく天狗の妖気も感じられる。

それと同時に勇儀の表情が変わっている。ものすごい楽しそうな笑顔。

理由は大体推測できるのだが、念のため勇儀に確認しようとしたが「ん？喧嘩の匂いがするねえ。旦那、早く行くよ」と言って走って行ってしまった。

「あー。何となく予想できてたけど、美鈴。大した距離はないけど、走れる？」

俺が美鈴にそう尋ねると、苦笑いしながら美鈴は「大丈夫だよ」と返事をした。

そして俺たちも急いで勇儀の後を勇儀につかず離れずで追っていた。

勇儀が進むままついていくと、鬼の里の入口を抜け、里の反対側の出入口をも通過してしまった。

目的地に向けて走っているのは間違いない。その証拠に妖気はどんどん濃くなってきており、何故か加えて大きな声も聞こえてきた。たくさんの声が入り混じっているから内容は解らない。

無言で走っている俺たちだったが、徐々に勇儀の走る速度が落ちてきたので俺たちも同じように速度を落とした。俺の記憶が間違っていないければ、この辺りにあるのは、昔よく宴会をしていた広場がある。勇儀も広場に向かって歩いてるようだ。

その予想は見事に的中し、広場には鬼と天狗が入り混じって誰かに向かって歓声を上げている。

何が起きているのかよく解らないので、勇儀とともに鬼の後ろからのぞいてみることにする。そこでは喧嘩と表現するよりも殺し合

いと言った方が早いぐらいの喧嘩が繰り広げられていた。

喧嘩は鬼と鬼ではなく、鬼と天狗。天狗は恐らく力のあるであろう天狗であったが、鬼側は俺が最も見知っている鬼だった。

氷芽だ。50年くらいぶりくらいに見たが、特に変わった様子もなかったことにほっとした。ほっとしたのはつかの間で、目の前の戦いを観戦する。

現状は氷芽の方が有利に進んでいるようだった。氷芽は天狗に反撃の機会を与えないようにして攻撃を打ち込んでいる。天狗はそれを防ぐことで精いっぱいになっており、反撃することができない。

と、ちよつと分析しているうちに氷芽の拳が天狗の頬をとらえ、そのまま天狗は倒れた。しばらくしても立ち上がらなかったため、天狗は気絶したのだろう。

その瞬間、鬼側から歓声が上がリ、天狗側はがっくりとうなだれた。だが、倒した当人である氷芽はどこかつまらなそうにため息を吐いているようだった。

氷芽が顔を上げると、偶然か俺と眼が合った。同時に氷芽は眼を見開いた。

氷芽の異変を感じ取ったと思われる一部の鬼は氷芽が見ている（つまりは俺）方を見て、俺のことを知っている鬼は驚き、解らない鬼は首をひねっているようだ。

氷芽はいきなり俺の方に走り出してきた。鬼たちは急いで道をあけるが、間に合わなかった鬼は吹っ飛ばされた。

あと数歩、と言ったところで、氷芽が勢いよく飛んできた。俺も氷芽を受けとめようとした。だが、それが悲劇を生んだ。

氷芽が飛んで高さは少しばかり高く、ちよつと俺の頭上に氷芽の頭が来るような状態となった。俺も氷芽をしっかりと受け止めたはずだったが、バランスを崩してしまう。

その結果、綺麗にジャーマンスープレックスが決まった。

「なんとというか、ごめん」

ジャーマンスープレックスが決まった状態のまま、氷芽に謝った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5741s/>

幻想郷へ来たようです

2011年10月29日21時18分発行